

婦人の子死と毛

第五卷  
第二號

## 謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歓迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戯、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

- 一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書。
- 一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。
- 一、原稿は、一切返附せざること。
- 一、封書の表には、凡て婦人子ども投稿と明記せらるべし。
- 一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。
- 一、照回は往復はがき又は速傳用切手封入のこと。

## 會告

本會に御入會なされんとする方は、會則にある通り會費は一ヶ月金拾錢ですから、其割合で女子高等師範學校附屬幼稚園内フレール會へ向け何ヶ月分か纏めてお納めの上、申込まれると、雜誌は常會から無代價で御送附します。會員にならないで、たい雜誌だけ買つて御讀みになりたい方は、日本橋區本石町三ノ廿三金昌堂へ御注文下さい、一冊拾錢六冊前金五拾七錢十二冊前金一圓拾錢他に郵税が一冊一錢づゝの割合です。

明治三十八年二月二日印刷  
同 年二月五日發行

不許  
複製

發行所	東京市麹町區飯田町四丁目十二番地
編輯者	東京市神田區久松一丁目十九番地
印刷者	東京市神田區錦町三丁目二十五番地
印刷所	東京市神田區錦町三丁目二十五番地
發行所	女子高等師範學校附屬幼稚園内
發賣所	東京市日本橋區本町三丁目三十三番地

大賣捌所 東京・東京堂●同東洋信文會社●同北隆館

婦人と子ども 第五卷第二號目次

子ども

けだもの會議……………	やまとの翁……………	一
勇ましい少女……………	太田龍東……………	二五
嗅き當てる法……………	……………	二二
軍服の色……………	……………	三三
ふ多福會……………	林天然……………	三三
婦人と子ども		
小兒の虚言につきて……………	黒田定治……………	三
家事經濟學原理……………	太田龍東……………	三三
貞一の記事……………	その母……………	三三
辻占のお菓子……………	平岩學洋……………	三三

家庭に於ける所感…………… 飯塚忠次郎…………… 五

みの字づくし料理…………… 石井泰次郎…………… 四

ラインスの歌…………… 雨峰生…………… 七

甲府に行く道にて…………… 牧羊生…………… 六

鶯…………… 湯川たま子…………… 六

葦…………… 全人…………… 六

フレーベル會俳句端書集…………… 鹽野奇零…………… 六

道すがらの感…………… 久保やま子…………… 七

家庭とは何ぞや…………… ……………… 七

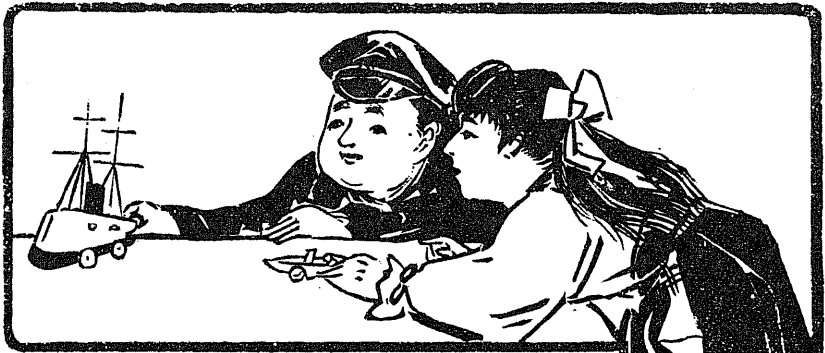
保育者のため

幼稚園案内…………… 東基吉…………… 五

雑報…………… ……………… 六

新刊紹介…………… ……………… 七

會報…………… ……………… 七



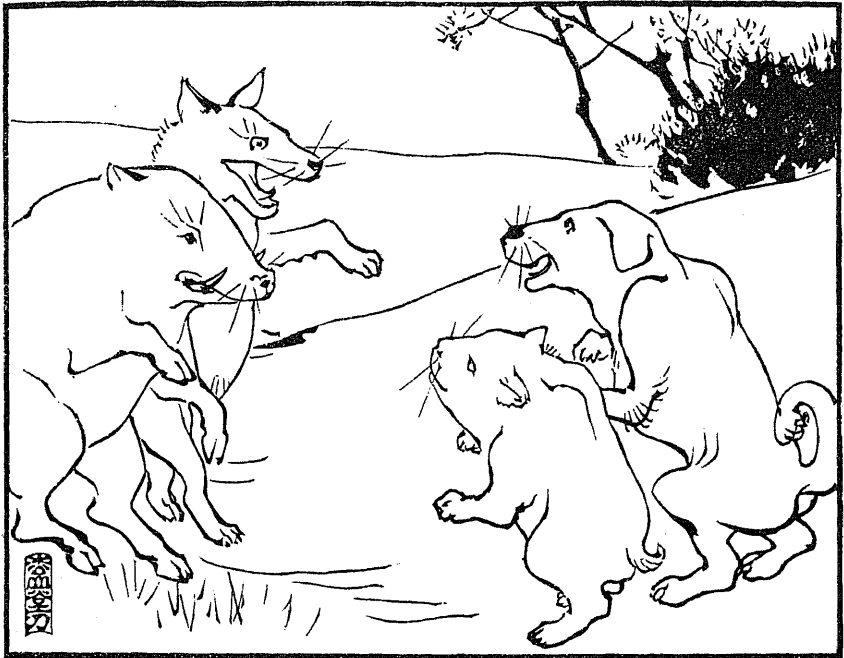
もど子と人婦

號二第卷五第

けだもの會議

やまとの翁

今晩は、けだもの會議が、奥山  
で開かれるといふことで、市街  
からも、野からも、山からも、  
いろいろのけだものが、連れ立  
って、奥山へと出かけて参りま  
す。



先づ、市街から出懸るものには  
 猫だの犬だのを始め、馬、牛、豕、鼠  
 などが参りますし、野山からは  
 獅子だの虎だの、野猪だの狼だ  
 の狐だの狸だの猿だの羊だの、  
 まだく澤山ありますが、とて  
 も數へ切れない位、後へくと  
 やつて参ります。

猫「や、狼さんに野猪さん、今晚  
 はお揃で、何處へ御出かけで  
 す」

「狼 やあ、誰かと思つたら、犬さんに猫さんか、僕等は今から、奥山

のけたもの會議へ出る積りで出かけたのだが、君等も何れ、御  
出席なさるのでしよう

「犬 はそうですか、昨晚、象君からは是非出席する様にとの御手紙で  
したから、實は、お隣りのお玉さんを誘つて、夫に出る積りで  
参つたのです

「豚 夫じゃ、今から一所に行くとしよう

「猫 どうか、御一所に願ひます

「狼 やー、下の方から驅つて来るのは、馬さんじゃないか、感心に  
早いもんだなあ、平生から駈けつけて居るから、夫に後から、  
重たそうに走つて追つ附かうとして居るのは、牛君の様だ、ど

うだ諸君、少し待つてやつて、皆で連れ立つて行くをにしたら

「賛成」

こんな風に、方々から澤山の獸類がやつて來まして、奥山は、まるで、けだもので一杯になりました。そこで、丁度時刻になり、ますと、奥の杉の木の間から、ニユーッと身體を出したのは、小山程もある大きな象で、これは、此會議の會長であります。

「もう會議の時間になりました、大抵皆さんお揃になりましたから、今から會議を始めましょう」

會長、鯨君だの海豹君など水の中のけだもの仲間が見えない様だが、御缺席ですか

「あ、さつき鯨君から電報が参りました。一寸読みあげます。」

ワレワレハミヅカラソトニデルノガユマルカライカンナガラ  
ケツセキスルミヅノナカノケモノ一ド一

この通りですから、皆さん御承知を願ひます。夫では、會議に移り  
ますが、本日の會議は、かねて、廻文に記して置きました通り、吾  
々けもの仲間の中で、誰が一番上に立つべきであるかといふこと、  
即ち位を定めようといふことなのであります。人間仲間のことを  
聞いて見ますと、上下の位がちゃんとして居るといふことです  
から、矢張り吾々の間にも、階級をつける必要があらうかと考へ  
られます。そこで、どういふ標準にして、これを定めるかといふ  
ことに付きて、皆さんと御相談を致したのでありますから、ど  
うか、御遠慮なく、十分御意見を述べて下さい。



といつて席に就く。中々大切な問題ですから、うっかり口を開くものはなく、暫らくの間は、ひっそりとして居りました。すると

「會長」

といつて立ったものがある。其聲といつたら、丸で、鐘の様に、そこから中に響き渡つて、恐ろしい大さなうなり聲であつたので、皆は、吃驚



して、見ると、夫は  
 虎であつた。黄色の  
 地に、黒い筋のいつた  
 皮を衣て、耳まで劈  
 けた口の邊りには針  
 の様な口髯を逆か立  
 て、大きな眼を鏡の  
 様に光らかして、其  
 場に立ち上りました。

諸君からは、まだ何も出ません様ですから、我輩の意見を申し  
 ます、この問題につきては、別に考へるに及ばんことで、つまり



一番強いけだものが、一番上になるのが當然のことで、之には誰も異議のない事と考へます、人間仲間のことは知らないが、吾々仲間では之より外に仕様はありますまい

象「なる程、虎君の意見に御賛成の方がございますか」

すると、熊だの豹だの狼だの野猪だのといふ強さうな連中は一度に

「賛成々々 至極賛成だ」

といつて立ちました。虎は、「どうだ、己の云ふことに反対する者を出て見ろ」といふ様な顔付をして、會場を、じろくと見渡して居ります。他のけだものらは、虎の威勢に恐れて仕舞ったものか、黙つて居て一向何にもいふものがない。すると、向ふの隅の方で、

猿さると狐きつねとの二匹ふたひきが、ひそくとさゝやいて居ゐましたが、やがて、猿さるが立たつて、

會長くわいちょう 私は猿さるですが、只今ただいま虎先生とらせんせいのお説せつは至極しごく尤もともとは存ぞんじま  
したしたが、だんぐ考かんがへて見みますと、虎先生とらせんせいのお考かんがへは、餘程よほど古ふるい様よう  
に思おもはれます、一番いちばん強つよいものが、一番いちばん上うへに立たつといふのは、あれ  
は、昔むかしの野蠻時代やばんじだいのことでありまして、今日こんにちではとてもそんな説せつ  
は立たちますまい、人間社会にんげんしゃかいのことを考かんがへてもそうで、野蠻やばんの時ときは、  
各自各自強つよい者ものがちであつたといふことです、所ところが、今日こんにちは夫それではい  
けない、今日こんにちはつまり智慧ちゐのある賢かしこい者ものが豪まういので、そういふ者もの  
が上うへに立たつ、(ヒヤくといふ者ものがあります)幾いくら強つよくつたつて、智ち  
慧ゑのない者ものだつたら 仕方しかたがない、下したにならんければならぬとい

ふのが、今日の有様だと考へます、

といふと、象は心の中でなる程、なる程、尤もの様だな、理屈がある様だと思つて

「さあ、皆さん、今猿君の述べられた説に賛成の方がございますか」

すると、狐だの狸だのが得意になつて立ち上つて賛成しました。虎だの狼だのは忌々しいと云ふ風な顔付してこちらを見て居ります。すると、向ふの方から

「會長」

と呼んで立ち上つたものがある、誰かを見ると犬でした

犬「だんぐ」皆さんの御説が生まして、どれもこれも、一應の理屈

はある様に考へられますけれども、然し、幾ら力があり知慧があつたからとて、信義を辨へないものはとても上に立つことは出来ません、今猿君は、力のある者が上に立つといふ事は、昔の野蠻時代のことで、今日は知慧のある者が上に立つのだといはれましたが、私は常々人間仲間と交際して居りますが、或學者の言つた事だといつて人間社會に信用せられて居る説に由りますと、知慧のある者が上に立つといふ時代も、餘程前の話のことで、今日の世の中は夫ではいかぬ、今日は、力の強いものでもなければ、知慧のあるものでもない。つまり徳の高いものが上に立つのだといつて居ます、故に吾々けたもの仲間には、於ても、矢張り、吾々の様なよく信義を守るものが一番上に立つ

べきであらうかと思ひます

と、中々甘く辯じました。會長の象は、心の中で、「なる程、さすが人間仲間と交際して居る丈けあって、前の猿の議論よりは、一層理屈がある、尤もな議論だと感心した体で」

象「さあ、皆さん、今犬君の述べられた説に賛成の方は立って下さ

さ

といふと、第一番に、馬が「賛成々々」といつて立ち上りました。すると、最初の虎は此時、猛然と立ち上つて、

「會長」

と叫びました。すると、皆のけだものは、其聲に吃驚して、そら又、始まつたといつて小さくなつて居ると、

「一体、前から黙って聞いて居ると、猿だの犬だのが、しきりと人間社會のことが、どうのこうのといつて居るが、吾々の仲間には夫ではいかぬと思ふ、智慧だの、道德だの、そんなことは、吾々の仲間には入用がないのである。智慧などゝ猿君はいふが、けだものゝ智慧といふやつは、夫こそ、猿智慧だ、何になるものか、まして道德などいふことがあるものでない、吾々の仲間では一番肝心なのは力があつて、誰にも負けないといふものでなければならぬ、夫でない、其仲間は屹度絶やされて仕舞ふのだ」といつて居る、  
「といつて居る」  
「といつて、奮然として、四方を睨み廻はして席に付く。」



すると、多勢の中には、虎君の説は尤だといふものもあり、いや猿君のが理屈があるといふものもあり、又は犬の説が一番穩當だといふのもあれば、中には、さっきの鼯鼠だの鼠だの蝙蝠の様なものは、いや、どっちにも賛成が出来ぬ、吾々は力もなければ、知慧もなく、さればと行って、道徳といふ事も知らぬだからこんな議論は面白くないと行って、議論は丸でがやくと騒ぎ出して、何が何だか分らなくなり、さすがの象も、どうしてよいか困って仕舞ひました、



(つづく)

## 勇ましい少女

太田 龍東

ロシアのウラジホストツクと云ふ所に、日本の本條良正と申す人が參つてゐました。此人は、播磨國山崎の藩士で、今から恰度四年前に、貿易商の爲めに參つたのであります。まんが悪くて先方に參りますと、間もなく妻は病死しました。しかし、女の子が二人ありましたから、良正は、この子の成長くなるのを樂しみに、毎日商業を勵みました。そうして商業もだん／＼繁昌して參りまして、遂にはりつばな貿易商人となり、親子三人が睦じく暮すやうになりました。

よい事ばかりは長く續かないものであります。此良正と云ふ人の家に、大變な事が出来て參つたのであります。それは甚麼事かと申しますと、

ある晩盜賊が遣て來まして、この家の品物を盗みだし、それから女の子二人をつれ出しまして、その上この家に火を附けて、焼いてしまふと云恐ろしい事でありました。

今その事を、これから詳しくお話して見ましよう。ころはちやうど、日本とロシアが戰爭をする少し前、お正月三日の夕方であります。日本では、今日はお正月の三日でありますからと云ふので、この良正と申す人も、御正月の御馳走をこしらへ、子供二人を前にならべまして、御馳走を食べながら、種々なお話しをして聞かせてゐました。

またこの子供の名を、お話しするのを忘れてゐましたから、今こゝに一寸申して置きます。姉の方は、今年十五で菊枝と云ひ、妹の方は、重殖と云つて十三であります。二人とも、毎日御飯をた

いたり、お掃除をしたりして、又お父さんのお留守の時は、家の番をしてお母さんの代りをいたします。さうして二人とも誠に美麗で可愛らしくありましたから、みなの人に賞められてゐました。

ところが、三人でお話してゐますと、門の戸をトントンとたたく人があります。お父さんがすぐ出て見ますと、ロシヤのお巡りさんがゐて「お前を少し調べたい事があるから、すぐ警察署まで来い、署長の命令で連れに参りました」と申します。良正と云ふ人は悪いことをして、警察に呼ばれるやうな人ではありませんが、お官のことでありますから、仕方なく参る事にしました。そこで女の二人をそばに呼び、「お父さんは、これから一寸お役所まで行つて来るから、爾等は寝んで待つて

ゐなさい、すぐ歸つてきます」と云つて、お巡りさんに連れられて参りました。

二人の女の子は、お父さんが留主になつたものですから、淋しくてすぐ寐んでしまいました。

しばらくすると、此家の門の外に、三人のロシヤ人が忍んで参りました。やがて其中の一人が細繩を出して、塀の内から外に出てゐる松の枝にかけて、それを傳つて塀の内へ飛び越へますと、他の二人も全じ様に、繩を傳つて内に飛び越へました。

此三人は、こん度は戸を外して内に入り、少しも恐れる様子もなく、まるで自分の家へ歸つたやうな調子で、棚の中から御馳走を出して、お酒を呑み初めました。

この物音に、姉の菊枝は眼を醒まして見ます

と、人の話し聲がしますから不思議で堪りません。お父さんは留主であるのに、誰が話しをしてゐるのであらう、夢ではあるまいかと思つて、よく様子伺つてゐますと、こんな話しをしてゐます。

甲『おい兄弟分、よく酔がまはつたちやねーか、しかし己ア、人の家に盗賊に忍入て、お馳走を食べて酒を呑んだのは、今晚が初めだよ、ゲツプ、ははアツ、のんきな盗賊様だね。』

乙『誰だつて初め手だらうよ。だが速く仕事爲ねーと、又主人が歸つて来ちや駄目だよ。』

丙『ま 大丈夫さ。此所から警察に行くにや一時間半かゝるからね、往來りで三時間はかゝらう。さう心配しねーで、腹が減ては戦が出来ねーから、しつかり詰め込むがーよ。』

こんな話をしなから、食つたり飲んだり大騒ぎ

を遣つてゐます。菊枝は夢とも思はれませんが、其儘起き直つて、尙ほ伺つてゐますと、又次の話をし出しました。

甲『この家の主人をうまく外に出してしまつたら、宛然自分の宅へ歸つた様な氣がするぢやねーか、後には玉子の様な可愛らしい二人の尼つ女が寐てゐるだけで、少しも憚る者はねーや。なアおい。ゲツプ。』

乙『しかし、よく考へて見りやア、可愛さうな者は二人の子ぢやねーか。寶物は盗られ家は焼かれてよ、その上自分迄で連れて、賣り飛ばされるとは露知らねーで、よく寐てゐるだらうがね。後でさぞ驚く事だらうよ。』

丙『オイ、手前のやうにお慈悲深い事ぢやとても確な盗賊様にやなれねーよ。己れ等だつて、

好んでこんな事ア爲たくはねーが、あの野郎（良正のこと）が昨年さうねんの暮くれに、餘り己等みづらに恥辱はぢをかゝせたから、一つはその仕返ししかへしぢやねーか、何にもそんなに可愛かあいさうに思ふ事ことアありやしねーや。』

甲『そ、そんなくだらねー事ことア止めにして、仕事しごとに蒐からうぢやねーか、那麼それにしても、仕事しごとの段取りだんどりを定めなきアならねーが、一番まっさ先まきに家に火ひを附つけてゐいて、それから品物しなモノと尼あまつ女ぢよとを連れ出すとしたら什麼どうかね。』

乙『オイ、何なにツ言いつてるんだよ、手前てめい酔拂よばらつてやがるな、先まきに火ひを附つけて堪たまるものか、そんな事ことしたら己おれさんたちが、先まきに焼やけらア、べらばーめ。不さ錯さうよ。火ひを付つけるなあ後あとに決きまつてらア。』

丙『それぢや仕事しごとにかゝらうだねーか。』

と三人さんは、酔拂よばらつてヒヨロ／＼しながら、品物モノを

出だしかけました。

この話はなしによつて見みますると、この盜賊とうぞくは、只品物モノを盗ぬすみに來きたばかりではなくて、良正りやせいと云いふ人に何か怨うらむことがあつて、その仇あだを返かへす爲ために、家に火ひを附つけたり、又また二人ふたりの子こをも連れ出だすと云いふことが知しれます。それにしても、何なんと殘酷ひんたらくしい仕方しかたではありませんか。

先程さきほどから、この話はなしを聞きいてゐた、菊枝きくえの心こころは甚し麼なでありませう。これが若もし、この年頃としごろの他ほかの娘むすめであつたなら、こんな時ときには決きま度ど、頭あたまから蒲團ふとんでも被かいで、只泣ただくより外ほかは仕方しかたがありませうまい。しかし、この菊枝きくえは年としこそ若わかいが、なか／＼男子おとこも及およばぬ勇氣げんきを以もつてゐます。

菊枝きくえは、この時ときすぐ飛とんで出て、盜賊どろぞくを斬きらうかと思おもひましたが、よく考かんがへて見みますると、先方むかひ

は鬼のやうな荒男三人、こちらは何と云つても手  
 弱い少女一人、恰度飛んで火の中に入る夏の虫の  
 様なもので、とても及ぶ事ではありません。それ  
 かと云つて、この儘にして居れば、今の話の通り  
 品物は盗られ、家には火を附けられ、その上自分  
 等二人は盜賊の手に捕られねばなりません。

出れば殺され、出なければ捕られ、どちらにし  
 ても助からぬこの場合、こんな悲しい事が亦とあ  
 りませうか、那麽に妾はまだ諦らめるとしても、  
 年も行かない妹が、甚麽に悲むであらふ。又何も  
 御存じない爹爹は、後で甚麽に御心配成さるであ  
 らふ、早く爹爹が歸つて下さらばよいに、わア、  
 什麼したらよからふ。と小さい狭い胸の中に、い  
 ろ／＼と思ひ廻らしてゐましたが、旋て心をと  
 直し、兎に角妹を起さうと思ひまして、重廻の顔

を見ますと、何も知らないで、晝間の遊びに疲勞  
 て、すや／＼とよく寐てゐます。

菊枝は、その無邪氣な可愛らしい重廻の顔を見  
 ますと、可愛さが一層増して參りまして、こんな  
 によく寐てゐるものを、無理に起して心配させた  
 くないと思ひましたが、それかと云つて、何時ま  
 でもこの儘には置かれませんかから、

『重廻さん、重廻さん起きなさいよ、大變なこと  
 が出来てよ。』

と小聲で起しますと、重廻は、如何にも寐むさう  
 な顔附で以て、

『姊さん、お父さんがお歸りなの。』

と云ひながら、又蒲團の中へ顔を入れてしまいま  
 した。

『不錯ちやありませんよ、早くお起きなさいった

らば、大變な事なの、あの盜賊がはいつたのよ。』

この盜賊と云ふ言葉には、いかな寢い重廻でもよほど驚いたと見へまして、すぐ起きて姉に絶りながら、はやブル／＼震へてゐます。

姉は言葉靜かに、

『そんなに恐愕つちや不可せんよ。まうお父さんがすぐお歸りだらうから、心配おしでないよ。』

『姉さん、盜賊なんかはいつて什麼したらいゝでせう。おつ恐愕いね。』

『盜賊が今にね、大切な品物を皆盜つて行きますから、それで盜らない先きに姉さんは、これから盜賊を斬つて遣りますから、重廻さんはこの押入の中に隠れてねて、甚麼な事があつても決度出は不可せんよ。』

と云へば、妹は心配さうな顔して、

『姉さんそんな事して、もし盜賊に斬られたら什麼して、お父さんのお歸りまで、待ちなさいよ。』と止めます。

『けれどね、もしお父さんのお歸りが遅くなるよね、家に火を附けられて、二人とも盜賊が連れて逃げると云ひましたよ。』

『さう大變ね、だつて姉さんが殺されちや、それこそ大變じやありませんか。』

『たとへ殺されても、この儘連れて逃げられたら、お父さんに申譯がないから、一刀でも斬り付けて死ねば諦めもつきます。重廻さんは、この様子をお父さんに知らして下さう。』

『でも姉さんが斬られたら、それを見てゐる譯には行きませんが、妾も一所に刀で斬つて遣りますよ。』

と云つて、今迄震へてゐたものが、俄に勇氣を出して参りました。すると姉は、

『駄目ですよ、若し二人とも殺されたら、このことをお父さんに知らして、仇を討つて貰ふ事が出来んぢやありませんか。そんな事を言はないで、姉さんの言ふことを聞いて、早く押入の中におは入りなさい。』

と無理に妹を押入に入れて、その身は襦袢を十文字にかけまして、床にかけてある寶刀を取り、盜賊を斬る覺悟をしました。

さて覺悟はして見ましたが、前にも申しました通り、年若き弱女の身ですから、とても手向つた所で勝つ見込はありません。そこで菊枝はよい考へを出しました。それは、盜賊が荷物を擔いで、玄關の階段を下る時に、隅の暗い所に匿れてゐて

斬り附けると云ふことであります。これは餘程よい考へであります、いくらすう／＼しい盜賊でも玄關先には火を燈しませんから、重い荷物を擔いで出る所を、暗討にすれば、うまく参りさうであります。

(つづく)

### 嗅ぎ當てる法

これも、一寸面白い手品ですが、ごでんじゆしませう。

先づ、四五人集い居る處で、させるを一本出して自分が、後ろ向いて居る中に、させるの吸口でもがんとびでも、中央でも、どこでも思ふ所を觸つて置いたら、自分は、夫を見ないで居て、嗅ぎ當て、見せるといふのです。すると、皆が面白がつて、そんならといふので始める。自分は後向くか



目を隠す。

但し、此四五人の中で、一人手品師の味方が居るのです。夫は味方だといふことを誰にも知らさな  
いで置かねばなりません

手品師が見ない中に、先づ誰か、させるの吸口  
に觸つたとする、よしと相圖すると、手品師は、  
此方向いて、一生懸命に嗅き始める、而し勿論、

幾ら嗅いだつて、分る筈がないのです。そこで、  
其四五人の中の味方を、側目で見ると、其人が、  
若し今吸口を觸つたのであると、自分の持つて居

たもの、例令ば鉛筆でも何でもよい、夫を何氣な  
しに口にくわへて相圖をする。若し、真中だつた  
ら、鉛筆の真中をいじくつて居る、若しがなくび

であつたら、鉛筆のけづつた方をいじくつて居る  
そこで、手品師は、鹿爪らしく、しきりに、させ

るのアツチヨツチを嗅いで見ながら、そ一つと、  
其味方の相圖を見て、若し味方が、尖の方をいじ  
つて居ると、あゝ分つた、がらくびが臭ふ様だ、  
がらくびだゝといつて嗅き當てるのです。

言つて見れば、何でもない様ですが、知らない人  
は、吃度不思議に思ひます、皆さん、お友だちを  
集めた時、一つ慰みにやつてごらん下さいまし。

### 軍服の色

日本の軍人の服は、今度の戦争には、皆薄茶色に  
染めた、カーキ色といふのになつて居るのは、  
皆さん御存知でしょう、カーキ色といふのは、  
アフリカの南に在るカーキ河といふ河の名から  
來たので、先年、英吉利とポーアと戦争した時ポ  
ーア人は、此河の泥で染めた軍服を着た。夫が即

ちカーキ色の軍服であつた。所で、この色は、三千メートルも離れると、丸で、空気の色と同じ様に見えて、一向見分けがつかなくなる。そこでさすがの英軍も之には、殆んど閉口したのであつたが、終には英軍の方でも、之に倣つて、植物質の染料を使つて、其軍服を、皆同様な薄黄色にして仕舞つたのだといふことです。

お多福會 (續)

林 天然

お多福共は達磨にすねられて、すつかり酔が醒めてしまひました、そこで唯其儘解散するのも餘り興がない、天氣の善いのを幸ひ、一つ運動會をやらうと一決しました。

『マア何がよいでしよー？』

『驅ツくら！』

『それが宜いでしよー』

と一同が廣々とした庭へ出た、一町半許り向へ、赤と白との旗二つたて、其赤旗を取るものには、鏡一個を、白旗を取るものには、白粉一箱を與へることに定め、やがて數十人のお多福が一行に併びました、丈や結髪や衣服や帯は、悉く違つて居るが額が狭いのと、頬が膨れ出て鼻が小さいのと、目が細くて耳が大きいのと、軀幹のデブ／＼肥満てる所は、皆一樣であります、用意整ふと、年老つたお多福が、『イチニ一のサーン!!』と相圖をするのと、お多福共は驅けるがかけるが、もう一生懸命皆兩手を握つて胸へ當て、河豚の様に小さい口をすばめ、ブクリンと頬を膨らして、馳け出した、然し其走るのは極めて意氣地がない恰で水蝸鼠に逐

はれて、逃迷ふ家鴨の様に、ヨタ／＼と駆ける、  
 そして一町餘りも走つた頃には、もう歩けなくな  
 つて、尻餅を搗くものあり、四ツん這になつて、  
 のたくり出すものあり、草履をぶつばなすものあ  
 り、帯が解けて二三尺も地を引ずるものもあつて  
 六分はもう參つてしまひました、でいよ／＼勝負  
 がついた、お牡丹さんが赤い旗を、お饅さんが白  
 い旗を、第一番に取つた、其二人は嬉し紛れに、  
 ヤアと黄色な聲で同時に叫んだ『お牡丹さんお目  
 出度う／＼』と大勢から祝はれたので、お牡丹さ  
 んは大得意、大勢は亦お饅さんの胴上をした、お  
 饅さんは別して大元氣、ヤア／＼と上げ下ろしさ  
 れる度毎に、手足を伸ばしたり、縮めたりして跳  
 躍つた、これで運動會はもう終たのである。  
 一同は高く唱歌を詠ひ、室内へ還らうとした、所

へポテポテとした布袋様、是れも年始還りとみえ  
 少し酔ひながら『待つた／＼おかみさん！、令嬢  
 君！、まだしまうのは早い、もう一度運動をやり  
 ましよう、鬼ツむっこをやらう』と、頻に運動を  
 やりたがる、お多福も今日は晴れの日、殊に未だ  
 早いから、一ツ和尚を黽てやらう』とそんなら布  
 袋さん鬼にお成りなさい』といふので、彼所でも  
 此所でも手を拍て『布袋さん此所／＼／＼和尚さ  
 ん此所／＼／＼』と打暈した、い、年をした布袋  
 が、大きなお腹を前へ突出してヨロ／＼と追廻は  
 した、布袋もお多福もお腹が大きくて足が短いから  
 その歩き方がまことに可笑い、遂にはヨツチヨイ  
 ／＼と掛聲で駆け廻はるが、一人も捕へることが  
 出来ない、すると年若いか多福などは、後から布  
 袋のテカ／＼頭をピタリとたゝき『布袋さん此所

!! ~ ~ !!』と擡椰ふ、彼所では大勢手を拍き  
 聲を揃へ、布袋、福祿、毘沙門、辨天!!!』と謔ひ  
 はやしてる、布袋はもう、ほとくして『已アも  
 う止すだ、何時まで追驅けたッて、際限がない、己  
 ア鬼はもう辭職するだ、誰れか候補者に立ち給へ』  
 と追驅ける氣がない、お多福共は少し張合抜けし  
 たけれども、愛嬌笑ひオツホホホー『鬼になつて  
 やらぬものは、天竺寺の餉箱脊負て炮烙爺〜』  
 と、謔ひながら布袋の周圍を取巻いた、布袋はず  
 るい、態と知らんふりをして、不意に近寄つた一  
 人をとらへた、もう役わがり。其お多福が代つた  
 大勢が『お多さん此所!! ~ ~!!』と打囃すと、布  
 袋も愛嬌顔へ皺をよせ、さも樂しさにニコ〜  
 笑ひ『お多ッ平此所!! ~ ~!!』とビョットビョロ  
 ~、駈け廻はり、ころふやら起さるやら大騒ぎ。

で午後三時頃愉快に運動會は終りを告げた。それ  
 から布袋はお多福共に別るゝに臨み『お多福諸君  
 萬歳! 萬々福!!』と三呼した、お多福も一同聲を  
 わげ『布袋大人萬歳! 萬々歳!!』と祝返へした。  
 やがてお多福共は室内へ入り、猶一度茶話會を開  
 き、頬邊たゞきながら、アンコロ餅を澤山喰べて  
 仲善く新年宴會をすませて、お別れを致しました  
 とさ先はおめでたう!!!



婦人と子ども



小兒の虚言よつきて

黒田定治

小兒は概して虚言を吐くものなり。元來、虚言は、如何なる點まで之を許すべきか、如何なる點まで許すべからざるものなるか、子女教育に於ては、頗る考慮すべき問題なりとす。つらく思ふに、吾人、人間社會は、實に虚言の寄り合ひの如く、虚言を以てせざれば世を渡ること能はざるか如き觀あるは、正直の者を指して、彼れは馬鹿正直なりと稱するにても知らるべし。政治家の如き、公使の如き、商業

家の如き、代言人の如き何れも殆んど虚言にて固め居るものといふも敢て過言にあらざるなり。加之、かく述ぶる吾も、之を聞く人も、或は何れも虚言を咄き居るなるべし。

然りとはいへども、之を日本人と西洋人とに見るに、虚言につきての感情は、二者の間頗る厚薄あるか如し。我邦人にありては、他人に向つて、ウソツキヨといふも、平然たりといへども、西洋人に至りては、甚しく之を耻辱と感ずるなり。

今虚言の性質につきて考ふるに、其性質に由りて或は罪なきあり否らざるあり。例令ば、或人は想像方に富み又は滑稽よりして、他人を喜はしむる爲めに虚言を咄くあり。此の如きは敢て損もなく罪もなきものなるべし。或は交際上に用ひらるゝ虚言あり、賜り物に輕少とか粗末とかの語を用ふるか如き、善しと思ひながらも、我子のことは他人には悪戯者で困るなどいふか如き、客來の時に際し、心に早く歸れかしと思ひつゝ、尙、歸らんとすれば態々引き留むるが如き、其他、書面の冒頭終末に、敬上とか頓首とかと記しなから、本文は一向、粗末の書き方をするが如き、之等は何れも儀式上の虚言にて、斯く言はざれば反つて他人に對し禮を失ひ、感情を害することゝなるべく、外國にても、同様用ゐらるゝ所にして、日常交際の上には必要なる虚言に屬すべし。故に虚言なればとて、悉く惡しとして責むべきにもあらず。只、道德上より見て責むべきものは、讒言を用ゐて人を陥るゝこととなり、已を利し人を害せんか爲めに咄く處の虚言なり。

小兒を教育するに當りては、虚言も亦一の方便となる場合多し。食事の時飯粒を落せば目つぶるべしとか、大食すれば腹さくべしとか、人の眞似をすれば鳥が灸をすえるなど言ふが如き之なり。其他醫療上必要な方便となることあるは、死に瀕せる病者に向つて、其全快を豫告して氣を引き立つることの看病學上の一法たるに因りても知るべし。此種の虚言は用ゐて差支なきのみならず、又甚だ必要なことなり。

凡そ吾人の日常語る處のものは、多くは眞理に違へることとなり、かゝる境遇に取りて教育せらるゝなれば、人の虚言を咄くは極めて當然のこと、言はざるを得ず。又實際より見るも、小兒生れて已に三ヶ月に及べば、即ち虚言を使つて號泣するに至る。小兒は殊に自發的即ち自利的の感情に富むものにして、小兒の虚言は、此の感情より出づるもの多し。小兒に在りては、他愛的の高尙なる感情未だ發達せず、自分を愛し、自分の快樂を得、自分の苦痛を避けんがために虚言を咄くこと甚だ多し。例へば甘きものを食したる後、既に食したるかと同へは未たなりと云ふ、是れ尙多きを得んが爲なり。或小兒夏時冷水を飲むことを禁ぜられたるに、或時齶齒の痛みたる場合に、冷水をふくませて一時を凌がせたることありしが、之を記憶し居りて、次の時しきりに齒か痛むといふ、されは醫者の處へ行かんと云ふに之を肯んぜずして冷水を含まんと望み、含ますれば飲み下せり、又夜は八時迄は寝ねざるをになしたりしに、或時腹痛の爲め其前に寝ねたるを覺え居りて、寝ねんことを欲するときは腹痛がすると云ふが如し。滑

稽的の感情は小兒にも發達せるものにて、自分の罰をまぬかれんが爲滑稽に變ずるをあり、此の如きは  
 大に小兒の心理學的、文學的志想を觀察する價値あるものとす。例へは親しき來客と話をなせるとき客  
 に向て馬鹿と云ふ、其時叱かれは、客に云ひたるに非ず犬に云ひたるなりなど、言ひぬけるが如し。又  
 小兒は權力の愛より虚言を言ふことあり、之は勝負事に多く彼の實際相撲に負けつゝも勝ちたりと云ふ  
 が如し、之は已の負けたるをを發見さるゝを不名譽と思ふも又其虚言を發見さるゝを不名譽と思ふ念よ  
 り何處までも虚言を通し漸く勝負の情しづまるに至つて遂に眞實の事を談するに至る、學校に於て告げ  
 口をする生徒のあるときは虚言を導き易し、又巧みに言を飾るは、小兒の道徳上危険なれば矯正すべき  
 ものとす。小兒は又概して想像界に住めるものなれば想像の大なるが爲に虚言を言ふことは往々見る所  
 なり、例へは横町にて馬位の犬を見た、博物館より大きい鯨の骨を見た等言ふが如き類なり。これは強  
 ち深く答ひる程にはあらざるも、一步を誤れば危険に陥るべし。伊太利に自殺の多きは、國人一般に  
 美術に富み想像に富めるを以て、已の想像を現實に行はんとして、果さいるより起るもの多しといふ、  
 又想像の危険に陥らしむるものある此の如し、又或若き婦人好みて人殺しの小説を愛讀せしが、其想像  
 にかられて遂には自ら人を殺して見たくなり、宿屋に於て其隣室の人を殺したるをあり、故に小兒が想  
 像にかられて虚言を吐くをも、一步誤れば道徳上甚だ危険なりとす。又小兒はよき目的の爲には虚言  
 を方便に使用して可なりと思へることあり、例へは小學校に於て年少兒の小用して叱らるゝを救はんが

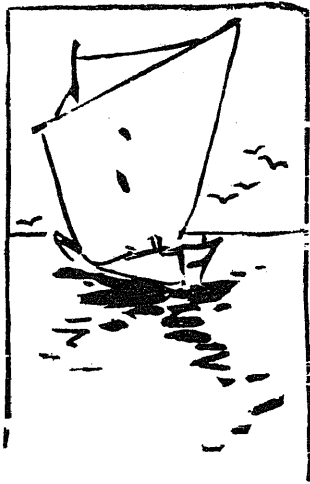


爲に其方便として水をこぼしたりと虚言を用ふることあり、されば其父母兄弟を救ふ爲には小兒は喜んで虚言を言ふならん。小兒は斯る場合には誠を守ることか高尚なると知り居るよりも、寧ろ他人を救ふを以て大切なりと思ひ居るなり、斯の如きは教育上重要な事として、教師の宜しく注意すべき所なり、即ちかく偏頗なる道德上の感情を小兒に保たしむることに付きては深く注意すべき所にして眞實を守ると共に他人を救ふをも大切なりと云ふ公平の感情を持たしむべきなり、何となれば小兒は尙未だ善惡の差を辨別すること能はざるを以て小さき善なる目的を達せんが爲に大惡をなすやも知るべからざるを以てなり。されど又一概に善をなすと同時に虚言を云ふへからすとも云ひ難し、例へば國家の爲には如何なる惡もなさざるを得ざるに至るとあり、或場合には善良なる目的の爲に虚言を使ふことあり、夫等は父母教師の最も注意すべき事となり、小兒は已の好める人と嫌へる人によりて、虚言の度に厚薄あり、已の愛する人には虚言少く、嫌へる人には虚言多し、故に小兒をして已を親愛せしむるは虚言を少くする一法なりとす。

女兒と男兒の比較につきては、統計的に調へたることなしといへども概して虚言は女兒に多きが如し。これ、一は女兒は一般に遠慮の念深く、男兒は淡泊無遠慮なるに因るなるべし。

要するに、吾人の處世上、徹頭徹尾眞實を守りて虚言をいはざることは殆んど難し。且つ或種の虚言に至つては、單に罪惡たらざるのみならず、反つて社交上必要のものもあり、されば全く虚言を離れて眞

實<sup>じつ</sup>の<sup>み</sup>を<sup>まも</sup>る<sup>こと</sup>は<sup>これ</sup>即<sup>すなは</sup>ち<sup>せい</sup>人<sup>じん</sup>の<sup>えき</sup>域<sup>に</sup>至<sup>いた</sup>る<sup>もの</sup>に<sup>して</sup>、<sup>いち</sup>朝<sup>つう</sup>一<sup>せき</sup>夕<sup>せき</sup>の<sup>よく</sup>す<sup>る</sup>所<sup>ところ</sup>に<sup>あ</sup>ら<sup>ず</sup>。故<sup>ゆへ</sup>に<sup>こ</sup>小<sup>ども</sup>兒<sup>も</sup>を<sup>けい</sup>育<sup>いく</sup>す<sup>る</sup>に<sup>さい</sup>際<sup>さい</sup>して<sup>は</sup>、<sup>よく</sup>小<sup>ども</sup>兒<sup>の</sup>虚<sup>うそ</sup>言<sup>ご</sup>を<sup>けん</sup>究<sup>きう</sup>して、<sup>その</sup>種<sup>しゆ</sup>類<sup>るる</sup>に<sup>よ</sup>り、<sup>ある</sup>或<sup>ひ</sup>は<sup>これ</sup>之<sup>を</sup>許<sup>ゆる</sup>し<sup>ある</sup>或<sup>ひ</sup>は<sup>これ</sup>之<sup>を</sup>禁<sup>きん</sup>す<sup>る</sup>等<sup>とう</sup>、<sup>てい</sup>一<sup>は</sup>定<sup>てい</sup>の<sup>は</sup>方<sup>は</sup>針<sup>しん</sup>を<sup>さ</sup>定<sup>て</sup>めて<sup>し</sup>訓<sup>くん</sup>練<sup>れん</sup>せ<sup>ざる</sup>べ<sup>か</sup>ら<sup>ざる</sup>なり。



家事經濟學原理

太田龍東

家事經濟學を説かんと欲せば、勢ひ經濟學の大要を述ぶるの必要を生ず。故に先づ經濟學の意義を略述し、以て本文に入らんと欲す。

第一章 經濟學

經濟學の定義は經濟學者の數に均しとは、嘗て何人か戲評せる所なり。以て知るべし。古來經濟學者の現はるる毎に、個々各特の定義を主張し、區々紛々未だ一定することなきを。然れども今強ひて、此等に就き小異を捨て、大同を取り、更に一般流行する所のものを採擇すれば、殆んど相近似せる共通の定義なるもの無きにあらざるなり。

英國學派の一般に採れる定義によれば、「經濟學

とは富の生産、交換、分配及び消費に關する學問なり」と云ふ、獨逸學派の一般に採れる定義によれば、「經濟學とは貨物の生産、流通、分配及び消費に關する學問なり」と云へり。其の富と云ひ貨物と云ふ、交換と云ふ流通と云ふ。用語上稍々廣狭の差別ありと云ふと雖も、その依りて以て相來りたる所を尋ねれば、二派の定義は、亦甚しき相違あらざるを知るなり。

抑も、吾人々類たるもの、繁雜極まる社會に立ちて、如何なる目的を以て活動するかと問はれ、即ち自利外ならざらん。而して又一方より觀れば他利なりと云ふを得べし。然り而して、この自利心が積極的に出すれば、物を獲得せんとする欲望を生じ、消極的に出づれば貯蓄心を生ず。即ちこの二者は自利心の結果なり。然りと雖も、この自

利心の極めて極端は、終に獲得は變じて貪欲となり、貯蓄は變じて吝嗇に陥る事ありと雖も、凡そ人として、自己の欲望を満足せしめんとの念慮は、如何なる人と雖も免れず。この欲望を満足せしむるに適當なるものを、經濟上之を名つけて富と云ふ。而して吾人々類は、其欲望を満たすに當り、可成的最少の勞費を以て、最大の結果を收得せんと欲するものなり。この願望は、即ち經濟の基にして、之れを濟經主義と稱す。この經濟主義により、順序正しく經濟上の所謂富を得以て之れを使用する目的とする人類の活動を指して、經濟的活動とは言ふなり。

## 第二章 家事經濟學

經濟學は二大部門に分つことを得。其一を純正經濟學と云ひ、二を應用經濟學と云ふ。

第一の純正經濟學とは、貨物の有する性質及び其相互關係せる現象を研究し、之れを理論上より推究して、一般に適する原則を確定するを云ひ、第二の應用經濟學とは、經濟上の原則を基礎として、之れを事情に照合し以て妥當なる手段方法を研究するものを云ふ。故に前者は歸納的研究に屬し、後者は演繹的研究に屬す。

今家事經濟學とは、何れの部門に屬すべきやは問はずして第二の應用經濟學の一部なる事を知らん。之れ家事經濟學は、主として一家内に於ける貨財の使用上、最も妥當なる手段方法を研究するに在ればなり。

凡そ、吾人が一家を組織するに於ては、一家を維持するに必要な費用を要す。而してこの費用を收得し又は使用するの巧拙如何によりて、其一

家の興廢存亡に關係す。於此、一家の收入及び支出は如何なる順序方法により、之れを管理經營するかを研究するの必要を生ず。之れ即ち家事經濟學なるもの、存する所以なり。彼の或る論者の如く、家事經濟學は單に節儉の事のみを以て、足れりとなすか如きに至りては、誤解も亦甚しと云ふ可し、何となれば、若し論者の如く、一家の經濟が單に節儉の事のみにて足るとせば、之れを一科の學問として研究するの必要なく、唯夫の古人が所謂「儉は美德なり」と云へる格言を尊守して、常に保守的生計に安んぜば足ればなり。

### 第三章 經濟學と家事經濟學

畢竟、家事經濟學とは、一家を齊ふの學問なり。一家能く齊は、常に無益の消費なきのみならず、大に生産力を増大堅固ならしむるを得べきなり。

而して一家は實に一國の基礎なり。家々能く齊ひて、業を勵み産を興さば一國の富強是に於て成就するを得べし。之れを以て、經濟學をして能く實際に活動して、其目的を達するを得せしむるには、必ずや常に、家事經濟學の助力を仰かざる可らず。家事經濟學の經濟學に關與せる所、實に著大なりと謂ふべし。余輩若し、經濟學の原語「エコノミー」の沿革を見れば、更らに兩者關係の密接なるの實を知るべし

抑もこの「エコノミー」なる語は、元と家内經濟の謂に外ならざりしに、世の進歩すると共に其範圍擴り、遂に一國の事を論ずるに及びて、單に「エコノミー」と云ひては事足らぬに至り、「ポリチカル」即ち政治的と云ふ文字を冠らせて、「ポリチカル、エコノミー」と稱し、其一家に關するものは特

に「ドメスチック」即ち家内と云ふ文字を冠らせて「ドメスチック、エコノミー」即ち家内經濟と呼ぶに至れり。

是れに由りて之れを觀れば、經濟學と家事經濟學との關係の親密なること、得て知るべきなり。

#### 第四章 家の収入

一家の収入は、其家及び人の状態によりて各異にす。然れ共、其収入が一家の經營上に使用せらるゝは、万種一轍に出づるものとす。今この収入の區別を左に略述せん。

##### 第一、物品収入と金錢收入

物品収入とは、農夫が米穀に於ける、工匠の器具に於けるが如く、物品其儘にて收得するものを云ふ。

金錢收入とは、これも讀んで字の如く、教員が

俸給に於ける、職工の賃錢に於ける如き、金錢其儘にて收得するものを云ふ。

##### 第二、經常收入と臨時收入

經常收入とは、地代、貸家料等の如く、一定の時期に於て規則正しく收納し、而も其收納の豫期し得るものにして、且つ多少永續の性質あるものを云ふ。

臨時收入とは、會社員の臨時配當金、又は贈與せられたる金錢物品等の如く、期限を定めずして不時に收得する金錢物品を云ふ。

此外學者によりて、種々類別するものあれど、餘り必要なを以て之れを省略しぬ。

#### 第五章 家の支出

吾人日常の生活に於て、其慾望を満足せしめんには、財貨を消費せざる可らず、然れ共、其消費よ

ろしきを得ざれば、其家計を保つ能はず、此點より考ふれば、支出も収入と共に相比して重大なるものなり。

古語に曰く「入るを量りて出るを制す」と、至言と言ふべし。然るに、人々此制規に反して巨万の富を忽ちにして滅却せる例古より多し。これが任に當る者大に鑑みざる可らず。彼の財貨の蓄積のみに汲々として、所謂義理人情を没却するが如き舉に出でざる機留意するを要す。

支出の種類に就ても多種あれど、予は左の如く別たんと欲す。

第一 物品支出と金銭支出

物品支出とは、婢僕職工等の賃錢を支拂ふ代りに、ある物品を給與するが如く、現物の儘にて支出するを云ふ

金銭支出とは、物品を買求めし時、金銭にて支拂ふ如く、通貨を以て支拂するを云ふ。

第二、經常支出と臨時支出

經常支出とは、一家の生計のため、日常規則正しく支出するものにて、臨時支出とは、豫期せざる事故により臨時に支出するを云ふ。

第六章 家計豫算

家を理むるは、尙ほ國を治むるが如し。豫算の家計に必要なは、尙ほ其國に必要なが如し。國會が年々紛擾して、或は解散せられ、或は停止せらるゝもの、皆之豫算の争なるを思ひ看よ、如何に其大切にして重大なるかを。一家に於ても而り。かの、大晦日になりて、或は夫婦間に不和を生じ、或は俄に一家舉つて其姿を隠すが如き、之れに原由するもの多し。

凡そ、豫算は收支を明確にし以て既往を察し將來を鑑むるの規矩なり。豫算の定めなくして家計を經理するは恰も舵なくして舟を行くが如く、方向つねに定まらずして、時には覆没の難に陥らん事計り難し。危険と云ふべし。

豫算を定むるには、先づ會計期間を定むるを要す。其期間は生活の程度、土地、職業等によりて一定し難ければ其種類によりて斟酌し、或は毎月或は二三月若くは半季等適宜に之れを定むるを便とす。例へば、官吏の如きは、普通月末仕切とし、商家にありては、月末仕切隔月仕切半季仕切等を期とし、農家にては、春秋二季若くば一年仕切に準じて、會計期を定むるが如し。

而して之れを調製するには、先づ一年の歳入を豫算し其割合に従ひて其々に歳出の割合を以て豫

算案を製し、家族一同よく討議の末之れを決定すべし。

其標準の概要を左に示す。而して歳入は人によりて異なれば、詳しき項目は各自案出すべし。

歳入

- 第一、定期収入
- 第二、臨時収入

歳出

- 第一、興産費
- 第二、交際費
- 第三、教育費
- 第四、生活費
- 第五、圖書費
- 第六、豫備費
- 第七、臨時費

- イ、被服費
- ロ、食費
- ハ、居住費
- ニ、雑費

第七章 貯蓄

人の世に於るや、或時には病魔の襲ふあり、或



時には水火の難あり、或は盜難、或は物價の暴騰  
 或は何等數へ來らば、其災禍蓋し少からざるべし。  
 之れ等事變の起るや、必ず先だつものは金錢なり。  
 其時に當りて、平素貯蓄のなきため困難に陥るも  
 の多からん。

彼の、蟻の炎天に糧食を運び、蜜蜂の花蕊を  
 吸ふて冬日蟄居の用に供するを看れば、自ら不時  
 の備、老後の用意として、年少く氣鋭さ時、豫め  
 奉養の幾分を割て貯蓄し置くの必要を感ずるなら  
 ん。

於此、吾人は會計上に於て、剩餘を出し之れを  
 貯蓄せざる可らざるを知れり。而して家事經濟の  
 目的は、畢竟餘剰の蓄積にあり。

之れより其貯蓄法の大要を述べん

(一) 郵便貯金

郵便貯金は、政府の事業にして、逓信大臣の管  
 理する所に係れば最も確實なるものなり。

而して貯金には限度あり。即ち一人一度の預金  
 は十錢以上とし、一日の預金高を五十圓以下とし、  
 元利總高五百圓までは何時にても預託に應ずるも  
 のとす。若し五百圓以上となれば之を公債に書替  
 へる方法あり。利子は年四分八厘にして、毎年三  
 月三十一日に計算して之れを元金に加ふるものと  
 す。

(二) 銀行貯蓄

貯蓄銀行には種々ありて、其確實の程度信用の  
 厚薄等は、其組織の確不確、人の適不適等により  
 て一様ならず、又預託方法に就ても、通常當座預  
 金、特別當座預金、定期預金、貯蓄預金等種々あ  
 り、之れ等は、實地に就て承合せらるべし。

銀行の重なるものを記さんに、東京貯蓄銀行（日本橋區兜町）、東京貯藏銀行（日本橋區万町）、東海貯蓄銀行（日本橋區檜物町）及び其他國立銀行等をよしとす。

利子も一定せざるも、郵便貯金よりは頗る高し。今例を擧げて計算を示さんに、人あり、年に六分の割として毎月金三十錢づゝ預くれば、初年には僅か三圓六十九錢なるも、十年経れば四十八圓八十五錢五厘となり、五十年目には千百三圓五十五錢五厘の多額に達するを見る。

夫れ一ヶ月三十錢の金は、普通の家より見れば多額にわらず。之れを少し他の冗費を制限すれば他の難き事か之れあらん。まさに三省すべきことなり。

今や露國と戦ひつゝあるの時に當り、我國民は

益々貯金の必要あるを覺ゆ。而して開戦以來、郵便貯金の増加は著しくして、一日の預入額三四萬圓に上り、從來は預入高と引出高とは略同比例を保ちしも、昨今に在りては貯金額激增の割合に引額少なくなれりと聞く、之れ實に國家の爲慶すべき事にして、吾が意を穿てるものと云ふべし。今參考の爲め、郵便貯金管理所の調査に依れる本年十月二十二日現在の貯金額及び員數を昨年同期に比したる統計を得たれば、左に記さん。

全國の部	貯金者	貯金額
十月二十二日		
本年	四、二六八、七八五	三七、〇九八、六六五
昨年	三、一五五、七〇四	三一、七四四、八六二
比較増	一、一一三、〇八一	五、三五三、八〇三
東京府の部		
(卅五、六兩年度の増減)		

年度 現在員 現在金額

卅六年度 一八八、三八八 四、一〇四、四九九四

卅五年度 一五一、四〇九 三、九四〇、七一七

増 減 三六、九二九 一六三、七八二

東京市の部

卅六年度 一六一、〇〇〇 三、六五〇、六〇五

卅五年度 一二八、九三二 三、五二二、九二六

増 減 三二、〇六八 一二七、六七九

右によれば、せんごくじん 全國民に於て増加せるは勿論、所謂

えどうこ 江戸兒も漸次貯金を進めつゝ、あるを見るべし。

(三) 保険

保険は、不慮の災厄危険に對する豫救方法なり。

而して保険には生命保険、火災保険、海上保険及び

物品保険等ありて、現今は都て會社事業として

各地方に設立せられたり。茲には最も家庭に近接

なる關係を有せる、生命火災兩保險の事を記すべし。

し。

(1) 生命保険

夫れ人生は浮雲の如し。朝たに紅顔ありて夕べ

に白骨となるもの世間何ぞ限らん。若し不幸にし

て、一朝主宰者の忽焉として死するあらんか。幸

福の源は涸れ困苦の泉は來り、遂に一家離散し妻

子眷族手を聯ねて、道途に迷ふに至るも保し難し

之れ何によるか、他なし、遠き慮なかりし故、

近き憂に出會せるなり。生命保險の要是に於て

か起る。

左に保險の類別を記さん

イ、終身保險、此法は、被保險人にして死亡する

時は、何時にても保險金を受取るを得べく、爾後

掛金を要せず。

(ロ)、定期保険、此法は、被保険にして期限内に死亡すれば、直ちに保険金を請取り得べく、死後は掛金を要せず。若し期限内、幸にして無事なれば掛金は損耗に歸す。

(ハ)、養老保険、此法は被保険人にして一定の年齢に達する時は、保険金を受取り得べく、若し満期に至らずして死すれば、其遺族に契約の金高を渡すなり。爾后掛金を要せず。

(ニ)、育生保険、此法は、一定の年限を定め、満期に至れば一定の金額を受取るを得べく、若し期限内に死亡する時は、直ちに子女に於て保険金を受取り、之れを以て其教育の資に供するを得べし。爾后掛金を要せず。

會社の重なるものは、明治生命保険株式會社(日本橋區坂本町)、帝國生命保険株式會社(日本橋

區檜物町) 日本生命保険株式會社(大坂東區北濱)等なり。

(2)、火災保險

火災保險とは、住宅、倉庫、商店、工場、家具等の一朝火災に罹り、損失に歸し去らん事を恐れ之が保險會社と約定し、平生一定の保険金を拂込み置くなり。然して其契約内に火災に罹る時は、其金額を受取るなり、若し期限内に火災なき時は、保險料を損失するも、これ等は小額なるを以て、かの一朝災難に罹りし時の事を想へば、何んでもなき事なり。

而して保險料は、其物如何によりて差あるも最も危険なるものは保險金百圓に對し、一ヶ年掛金四圓五十錢又危険の少なきものは、百圓に對し一ヶ年一圓餘の掛金なりとす。

現今我國にて重なるものは、東京火災保險株式會社（京橋區銀座）明治火災保險株式會社（日本橋區坂本町）、日本火災保險（大坂北區中島）大坂保險（大坂西區西長堀）、東洋保險（京橋區八官町）等なり

第八章 節儉と吝嗇

抑も節儉と吝嗇とは、まことに相似て非なるものなり。恰も剛勇と疎暴、從順と卑屈との相似て、而して却りて正反對のものたるが如きものなり。

節儉とは、消費すべきを消費すると同時に、無用の消費を節約するの謂なり、之れに反して吝嗇とは、只蓄積を之れ事とし、消費すべきに消費せず、彼の「出す事は爪の垢をも吝み、入る事ならば猫の糞にても欲す」てふ的の如きを云ふ。

然るに世人稍もすれば、此二者を混合するもの

あり。彼等は以爲らく、財は生命に次ぎて人生に最も必要なるものなり。財をだに多く有すれば、人世の幸福極れり、他の欲望は毫も羨望追求するに、足らざるなりと。以て財の消費とさへ言へば必要なる消費すら之れを爲さず、所謂、爪に燈を點じ、鹽を嘗めて蓄財之れ事とし、甚しきに至りては、財を愛するの餘、人情を忘れ慈悲心を缺き終身守銭奴となりて、社會衆人の爪弾きとなるを思はざる者あり。噫、

蓄財は喜ぶべしと雖も、其極端に走り如斯ならば、其持有する貴重なる金錢は、恰も、瓦礫と相遠ざからざるに至る、豈思はざる可けんや。

人は儉にして能く貯蓄し、能く増殖し、以て之れをよろしき使用せざる可らず、之れを換言すれば、能く財を散ぜんと欲するものは、先づ能く

財を積まざる可らず、財を積まんと欲するものは須からく儉なるべし。

古語に曰く、「金を集むるに巧みならんよりは、金を守るに約やかなれ」と、而して金を集むるは多く男子の事にして、金を守るは女子の職たり。然らば、主婦たらんものは能く、この理を明かに以て其任を全ふすべし。女子の任、亦重い哉。

(完)

貞一の日記 (拔萃) (明治廿六年五月卅一日男兒)

その母

明治三十七年十二月六日、父粥を食へさせんとしたるに、母に食へさせよとて、泣きてそりかへる十二月九日 貞ちゃん、いゝ子をして頂戴といへば、顔を撫でられる、また、父たわむれて、

貞一の手を、なむれば直に、父の衣服にすりつけて拭ふ、

十二月十二日 今日ばあやに負はれ、母に伴はれて小原先生の許に行く、此頃は、余程元氣もよく肥えて来た様に、思はるゝ故、体重もいくらか、増したるならんと樂しみて行きしに、案外にも、此前の時より減じたりとは、八、四七〇、〇先生は今少し食量を増せと命ぜらる。

粥 七分粥にして一晝夜に 凡そ一合四勺 魚肉 廿匁

野菜 百合ジャガイモ蕪菁 隠元豆を隔日

此頃貞一の能く知つて居る事は、耳、鼻、口、眼、ペロといへば、一寸舌の先を見せ、齒はとさけば口をがいめて、齒を少し見せる、イタイくはととへば、下の方を指し、ウンくと云ふ、これは 大便の出る時、余りかたくて痛か

りしよりなり、又人さし指と中指の股をさしては痛いといふ、コレハ此間、何かにて一寸傷けし事ありしよりいふなり。

十二月十八日 何時の間に覺えしか、猫の聲をきいて、ニャン〜と云ふ、猫は何といふて鳴くのときけば、直にニャン〜と答ふ。

十二月十九日 マンマは誰がこしらへるとへば バーバ マンマはどこへ喰べるのときくと自分の口を指さす

十二月廿四日 此頃鼻々といつて、指にて鼻をつくことを 教へられ、鼻々といへば直に指を人の鼻に持ち來りてつく、また犬はワア〜といふ、これは ワン〜と教へしを、誤りていふなり、猫はときけばニャ〜、犬はワア〜、真ちやんはと問へばマンマ〜と答へて、人を

笑はせる。

十二月廿七日 小原先生の許に行きて 体重を計

る、九、一五〇、〇あり、野菜は かぶ、大根、などよく 煮て極めて少しを興ふべしといはれたり、アツタといへば、火鉢に手をかざしてあたる、お羽織はときくと自分の羽織を、引張つて見せる。

十二月廿九日 眠る時の 兒守歌に、桃から生れた桃太郎を唱へば、喜び他の歌を唱へば エー〜といつてやめさせる、上齒五枚になる。

明治卅八年一月一日 何のつもりかア、イ、といふ故、アイウエオのつもりにして、ウをいはずんとすれば、ブといふ、またワウ〜、ジヤイ〜などつゞけて云ふ、今日は元氣よく、火鉢を押して歩く、今迄一晝夜五回に食し居りし

を 五回の中一回を葛湯にす、毎日起きる時間によりて、遅速あれど、

朝六時 十時 二時 六時の定なり。

七時頃より十時まで眠り、其時に葛湯を飲まず、

一月四日 久しぶりにて又下痢し初め、今日は三回あり、原因は昨日隠元豆の分量多きに過ぎしならんか、野菜を廢す。

一月六日 今日は便通なし、元氣は相變らずよろし、此頃はウマ〜と、バア〜とを一所にして、ウマバーといふ、大抵食べたくなりて怒る時なり。

一月七日 下痢四回 父と小原先生の許に行くと、犬を見て ワ〜といふ、昨日は猫の途中、犬を見てニヤン〜といひたり、漸く犬と猫の區別付きたる如し。

一月八日 正月休み中、家に歸り居りし 春さん

今日来る、余程嬉しき者と見へ、傍へよりては抱けとせがみ、又自分の持てる密相の皮を、春

さんに渡して、御機嫌とり、ア、イ、ブなどいふ。

一月十日 犬はと問へばワ〜、猫はと問へばニヤン〜、貞ちやんと問へば、黙つて答へずなりぬ。

今日は父の學校 昨日旅順陥落の祝捷會ありし爲 臨時休業となりし故貞一を つれて 動物園に行く、象を見て、不思議相に眺め、鳥の數多集れる所を見ては喜ぶ。

一月十二日 便通は一回水分少くなる。父の白き毛の襟卷の、かゝれるを見付けて外に行かんとせがむ、何時でも湯に行く時貞一に巻きてやる故なり。



此頃真一の能く云ふ事は、ワー／＼も全じ、表とい

つもつゞけること、ニヤー／＼も全じ、表とい

へば、あつか(燈火)何れも機嫌のよき時なり。

一月十三日 今夕も湯に行く時、三日月を、見て

仰向になり、アツカ／＼といひ、手を舉げて取

らんとす。

頭で押合といへば、眼を上へ向け、額越しに、

にらみながら、頭を動かして、父の頭に押しつ

ける様可笑し。

御醫者様へ行つて、何をもらふのと、聞けば、

必オツキ(お薬)と答ふ。

便通なし

一月十八日 湯に入る時、父の肩に手をかけてつ

かまり居るも、身軀を沈む際、こつち手々も

か入れといへば、直ぐに肩より外つして入れる。

便通一回 柔さを少量、

一月十九日 父汽車の出る真似とて、口笛を鳴ら

し、シユツ／＼といふ、父さんは何といひます

かと問へばシウ／＼と真似す。

便通三回

一月廿日 おもちやの達摩をとり、だるまさんの

眼はと問へば眼を指さす。

一月廿一日 ピヤノにて、コチロンの曲を、弾き

出せば、何時までも 弾けとて、他曲に移るを

許さず、後父口笛にて、其曲を、唱へば、直ち

にエー／＼といつて、ピヤノの方を指さす、

二三日前までは 父汽車の真似とて チンゴ

／＼といへば自分も真似する、つもりにて

唯アア／＼と云ふのみなりしが、今夕はグー

／＼といふ、電車 とさけば シツシツと云ふ、

瀛車とまちがへたるなり、  
醫師の許に行き体重を計る増減なし。

### 辻占のおかし

於東京盲啞學校 平 岩 學 洋

諸君、私わ辻占とれかしの關係について、一言お話し致したいと思ひます、一体わの辻占と云うものわ、何のためにできてゐるのでありましょーか、特に、南京豆の中にいれたり、又種々のおかしの中にいれてゐるものわ、いかなる目的を以て、製造したのでありましょーか、つまりは人を慰め樂ましめて、一の興を興えるためで有りましょーか。然らば、此の興味をそへたといふ者は、主として、誰のためにできたのでありましょーか、大人のためでありましょーか、又子供のためでありま

しよーか、或わ誰彼の別なく、只一つの習慣的に、入てゐるのでありましょーか、とにかく、これわ一つの研究問題であると思ひます。

先夫は夫として其のつぢうらには、いかなるものが書てゐるかと研究して見ますと、一つとして、碌な事わ書てないのであります、實に有害な物許りでありまして、子供にわ、聞かするもいましき事許りで、常に私わ、残念に思うて居るのであります。これは今少し注意して、風俗上社會上、少しも差支はない様な物を書て貰ひたいのである。よし夫迄、行かなくとも其辻占の意味わ、今まで通りとしても、言いまわしを上手にして貰ひたいである。

そこで、此辻うらが子供のために出来てゐると致しますれば、實に、驚嘆の至りである、危険千

萬な物である、子供の道徳上の問題に、影響することか頗る大でありましよう。幼年兒童わ、よしや、その辻裏を見た所が、意味も分らず、讀めもせぬ故、何とも思わぬかも知れぬが、然し子供とゆ一者は、其の辻裏に對して、疑を起して、書てある事柄は何であるか、と思ふ所からして、兄なり、姉なりに、聞とゆ一事は、自然である、私共折々見受もし、又聞かれた事もあるのであります其の時子供の間に對して、答えてやらぬとゆ一のわよくないのである、必ず満足なる答をしてやらねばならぬ、満足なる答をしてやるにわ、其の辻裏の意味次第で、能き方に、解釋して説明する事ができませすけれ共、思わしくない意味の者にかいてわ、甚だ困難するのである、是に至ると、如何にしてよきか、私は殆ど口を開く事が出来ないの

である、わりのまゝいえば、必ず悪いし、いはねば子供は益々疑の心を起しますから、何とかいふてやるのがよいと思ひます、此の時はやむを得ませぬから、辻裏の文句に反しても臨機の文句を拵らえていつてやるのがよいと思ひます、然し辻裏の文句が、子供にわかる時は、そのはかり事わうましくない場合もありましよう、又比較的大きな子供が見ました時わ、或る者は分らぬかもしれませぬが、殆ど大体の意味に於ては、分るだろーと思ひます、この意味の分かる子供に對してわ、一つの計略も取れないし、善き方に意味を仕向る事もできないで、誠に困るのであります、大きな子供に對してわ、必ず道徳上に影響するのわ、勿論或る意味に於ては、生理上の方面にも、よ程關係する事は勿論、特に女子のためにわ、私は尙ほ一

層と感じてゐるのであります、この事に就きましてわ、私が嘗て多數なる婦女子の、かるた會に行きました時、御互に辻裏のはいつてゐる、おかしを食べた時、其の辻裏に就て妙な事を、觀察した事がありました、この事は只今お話し申す限りでないから止めておきます。

とにかく、こんなつまらぬおかしわ、いかに子供が好んでも、興えもせず、又子供自身にも、買わせぬ様にするがよいのです、又其の家族の人等も、大人と雖も、買つて來たり、慰み半分になだりしてわなりません、又他人から、お土産としてかゝるおかし等貰つた時わ、子供に見せぬがよい又其れを子供が知つて居る場合にわ、他の菓子等と取りかへて、興えるがよいと思ひます、他所の子供に土産として、お菓子等を送る時分にも、其

の考がなければなりません、凡て初が大切でありますから、幼児の時から、決してかゝるかし類を買つてもたべてもいかなないとゆゝ一感念を興えて習慣的にしてかくのがよいと思ひます。

然しながら、又此の辻裏をうまく、有利に教育上に應用したならば、所謂自然的の教育で、大なる功を子供に興える事ができると思ひます、故に強ち、私は、辻裏の菓子を頭から駄目だとわ申しません、これを教育上に應用しまするにわ、つまらぬ辻裏の文句等を改良する事であります、大人にわ、大人相當な、子供にわ子供相當な、婦女にわ夫れ相當な者を撰で、或は教養上、或は商業上、或は農工業上、歸する所わ等しく教育の上根拠を以て、大なる目的を以て、教育上に多大の利を興える様にしたいのであります、實に自

然教育の結果とゆ一者わ、恐ろしい者であります。

それならば、如何な風に改良したらよいかと申しますると、夫れは色々澤山ありまして、一々擧げましたら、限りもない事でありまして、只一つ二つ其の例を申しあげて見ましよう。油斷大敵兎も龜にまける、難儀の事に勝つ人となれ、はとでさえ親の恩わ忘れぬ、先に御かんとする人は先づからだを動かせ、等の如き事で、もつと適切な例がありましょ一けれ共、先づ斯様にしたらよかる一と思ひます、又言葉とくゝの間の如き所に、書等入れたたり、又書許りでもよいと思ひます、然してそれを判断せしめるのわ、尤も能き事と信する者であります。

然るに、この改良の事に就きましてわ、家庭や

私共が、如何にやかましくゆいしました所が、仕方がないのでありますから、我れくゝの取る所わ、只斯る者を買ひもせず、與えもせぬとゆ一事が、一番よいのであります、この改良の點に向つてわ世の幾多の製造人に望むより外わないのであります、私わ特に製造人に向つて、この改良の事をおん事を希望する者であります、然るに多くの商人中、いか程此の如き教育的の考を以ておる者がありましょ一か、甚だ遺憾な事でありますけれ共今日の場合止むを得ませぬから、我れくゝ諸君は大なる考を以て、社會改良の一員として、自ら任じて、これら製造人に向つて、改良の事をすゝめもし、説明もして、彼等によくその利を呑みこませて、我れくゝ皆様の希望の達する様にすものも

我れくの務めでわあるまいかと思ひます、今后大にかゝる方面に向つて、お互に盡力致したいと思ひます。

家庭に於ける所感

(承前)

長野市 飯塚忠次郎

(二) 小兒と日記

日記とはよんで字の如く其日そのひの事柄を思ひのまゝにかくので御座いまして、即ち、そのひのうちにあつたをや、したこと、なぞをつくらずかざらずかきつくるのでありますけれど、然し完全したところの日記を未だたねれなき無經驗の小兒たちに、私等が要求することはあまりにむりであるかもしれませんが、私はあながち始終一讀瞭然たる完全な日記を小供にかゝせると申すのではありません、たいせめてはまがりなりに不完全

ながらも日記をかくことを教へていたゞきたいのであります、作文の練習になることは勿論、後になつてみると大に参考にもなつてよかるうかと存じますから、大に御獎勵あらんことをのぞむのであります、さて、其教へかたには色々よい方法が御座いまいしうが、先づ簡単に説明申そうならば、先づ第一に年月と天候とをかゝせることで、一寸申せば今日は何年の何月何日であつて何曜日であつた、雪がふつたとか、雨だとか、または、風だとか、晴だとかといふようなことをかゝせるので、そのようなことがすらすらとかけ得る様になつたならば、第二にうつるのです、今日はどうしてあそんだとか、先生にほめられたとかと、自分の行爲をかゝせるのです、それもわけなくかけるようになったならば、第三にうつるのです、他

人のことやら、自然のことをかくことを教へる、けふは誰れがきたとか、庭にながさいていたとか、とりがよいこえをしてないでゐたとかと、いふようなことをかゝせる、それもよくかけるようになったならば、第四にうつるので、即ち、感じたことをかゝせることで、學校からかへつて來るとちうでみた女兒はかわいそうだったとか、けふは母さまにねほめ言葉をいたゞいてたいへんうれしかつたとか、又は自分はこう思ふなぞと、ことにふれものにせつしてかゝじたことがらをかゝせるのであります、それがみんなかけるようになればつきひのたつうちにはかくこともなれてきて字もきれいに完全な日記がそこではじめてできあがるようになります。此日記に用ゆべくてきせつなる文体は言文一致体であるかと思はれます。

これは家庭に於ける文學の一端ともなり得ずし、又日記ほど小兒にとつて有益なものはないので、自分が成長の後ちの参考となることは申迄もなく又昔を物語る友ともなりますからせひとも日記をかゝせることをお教へなさるよう渴望致します、まへにも申上げた如く日記をかゝすことを教へておくとしらすしらすのうちに、習字のけいこにもなり幾分なりとも作文のたすけとなることであります、なるべくならば一定した野紙に筆でかゝせることです、鉛筆でもわるいことはありませぬけれど、鉛筆ではつきひのたつにつれてすりきえたりにして文字がわからなくなりませぬから、鉛筆でかいたものは永久に保存してをくなんていふことは難事せう、ですから手數かもしれませぬけれどなるべく筆でかゝせるようなしうかんをつけては

しいのであります。

それで日記はいつごろからはぢめたならよかろうかといふに何れ自分で書ける時になつてからでなくてはなりません、即ち學齡に達してから徐々にかくことをおしへたならばよいことと思ひます、初めはごく簡單にして小兒の智育と精神の發達につれて、第一、第二、第三、第四といふように順序をふんでだんぐと教へてやるのです、近來日記の必要からして色々な日記帳ができたようではあります、私はむしろ小兒などには各自の家庭の人々がさだめてやつて、一定したけいしにかゝせてゐるところがあつたならてんざくをしてやるのです、日記はまことに人間の一生の歴史であります、そして日記のうちには必ず虚言とか、悪口とかをかゝせぬ様平素から注意せねばいけません

ん、自分の心からわらだしたことをかゝせるように教へねばなりません、ありもしないことをかゝせてはいけません、日記がらくがきにならんようにくれぐれも心がけていたゞきたい、何卒その心ぐみで此の日記をかくことを教へ、その風習を小兒のあいだに鼓吹してくださいませ、小兒の日記は變じて青年日誌となり、家庭日記となり、猶進んでは國家日史となるのでなんと皆さま大きなことではありませんか。(未完)





料理の内の字づくしの

石井泰次郎

旅順の意味のこもりたる物

吸物

港しんじよ  
みちん防風

原料  
げんりよう

角形はんぺん 一 枚

防風 小一 把

かつらを煎汁 五 合余

醬 油こきもの 一 勺内

食鹽 二匁五分

港しんじよは、魚肉をかまぼこの肉のやうに摺てつくるべきを、手がるには、つくりたるはんぺんを買ひてと、のふるなり、まづはんぺんを、左右の端をすこし切て、うすく一分余

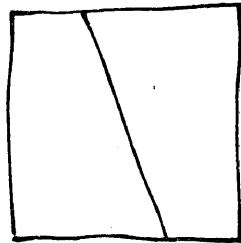
にへきて、へぎたるを、圖の如く切方すべし

上の如く、角の物を二つ

にすぢかひにさるなり、

港の形をなせるゆゑに、

みたと、はいふなり



防風は、水にて洗ひて、莖のみを、小口にみぢんに切るべし、

右出来たる上にて、かつを煎汁をとりおきて

だしを鍋に入れて、煮たて、醬油を加へ

て、醬油の自然にまじるをまちて、鹽を一

匁余を加へ、味をこゝろみて、又鹽を入る

べし、

○

椀わんの小ちひなるに、しんじよをい入れ、其上そのうへにみぢん防風ぼうふうをばら〜とおきて、上うへより、右みぎの汁じゆをそゝぎ入るゝなり

○旅順りょんの意味いみは、港進乘みなとじんじよとしても、しんじよ、即ち糝蒸せんじようとしても、又また々かなにて、しんじよ〇〇として、進〇の心こゝもれり、

そのうへ、防風ぼうふうの名なも、みぢんといふ切方きりかたも、それから、港みなとの上うへから、ばら〜といふ所ところも、

◎御考おんがうへになるとわかりましよう、

三色玉子さんしきたまご

白はく色しき 黄わう色しき  
あつさゝろ

原料げんりやう

砂さ 雞けい 卵らん  
糖とう 卵らん

十四箇じゆじゆ  
三十四匁さんじゆじゆもん

鹽しほ 六む 匁もんめ

さらしわん 六む 匁もんめ

雞卵けいらんを、湯鍋ゆなべに入れ、湯煮ゆにして、煮にえたるを試こころみて、水みづにとりうつして、からをくたきてひきて庖丁刀ばうてうとうにて切きめぐらして二つにわりて、中なかの黄味きいみを取とりだして、白しろの方は内うちについたる黄味きいみののこりを布巾ふきんにてぬぐひ去さりて、庖丁刀ばうてうとうにて細こまかに切きり、砂糖さとう十六匁じゆじゆもんめ、食鹽しょくえん三匁さんもんめをませ合せあはせ(木杓子きしやくしにてまする)馬尾篩ばいしにてうらごしにこして、次つぎに黄味きいみもくづして、砂糖さとう十八匁じゆじゆもんめ、食鹽しょくえん三匁さんもんめをませて、馬尾篩ばいしにてうらごしにこして、

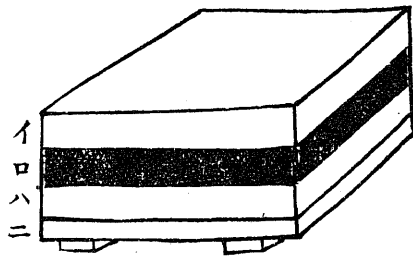
○前まへにこしたる白しろは白しろとして皿さらにとりおき、後のちのは又別またつの皿さらにこしかくべし、さて白しろの方ほう、三分さんぶんの一いちを別またつの皿さらにとり分わけて

北海道せいの晒あん粉を、粉のまゝ、其一分に合せておくべし、

それから、おしわくににて、下のそこになしたる方に美濃がみを大きめに敷て、まづ白をつめて上の方の板にて中へおしつけ、次にあんませたるを入れ、次に黄味の分を入れて一々入れてはおしわくすべし、

次にかかるくおしつけて、うらがへして、(靴しわくをうらがへすなり) ふたの方へ中ののをせて、わくを取さるべし、右出来の上、蒸籠に入れて、むすこと十分間してよし

下の圖はおしわくより、出したる圖なり、上の白の上に美濃がみつきたりしを、取のぞきたるなりおしわくの寸法は定りなし、此圖の



- (イ) 小白色
- (ロ) 小豆色
- (ハ) 黄色
- (ニ) おしわくの蓋

形は、内のり五寸四方の、深さ二寸(但上下のふたの厚さ、下が三分、上が五分をのぞきて、正味一寸二分となる)なり、四方のわつさ三分あつにて出来たるわくなり、

◎ 小豆色、あづきの煮汁をつくりて、そむるが本法なり、こゝには略してつくる仕方をなしたるなり

ラインスの歌

雨 峰 生

五つとせいつか過ぎざりて

いつたびながき冬と夏

ゆきてかへらずなりたれど

深山がくれの谷間より

湧き来る清き水の音

今またさくぞうれしけれ

ひとたびならず二度までも

人里遠くはなれたる

寂びて思ひもすみわたる

いともけわしき崖の下

しづけき空の姿をも

うちまじえたる景色をば

われはうれしくながめけり

さても楓のこのあたり

樹陰にかつてやすらひし

時節もふたゝびめぐりきぬ

人家のわれにし其のあとは

四期をりくゝにかれさかえ

花樹林いまはおひしげり

なけば果の實も熟しつゝ

緑りいろなる衣をば

まとひかざせる其の状は

よしや人にはしられずに

此のくさむらに埋るとも

寂しさをまざる森影の

景色をたえてそこなはで

のこりしかげぞうれしけれ

ひと度ならず二度までも

われはそれなる生垣を

(名は生垣とかなはねど)

無下にまとへるうねり木の

列べるさまを見たりけり

あはれ牧場のうれしさよ

縁りとぼそにのぞみつゝ

輪形ながらにのぼりゆく

煙りは静か木の間より

それとさだかにわかねども

人家すくなき森のうち

世をばつらしとのがれたる

隠者の獨りすまゐりして

楳火をもやす住家そも

あるは定めるやどもなく

かり麻をよそに佗びめぐる

雅び男風情のわざにやと

覺束なくもおもほえて

幽かに目には見えにけり」

かゝるうれしきをもかげは

身やよしそこにあらぬとも

めしひのなかむそれならず

いとまさびしき庵にすみ

わるは塵だつ巷にか

寺のすみにとすむとも

目にうつろへる景色には

少時の間をもかざされぬ」

疲勞にせまうし吾が身をば

吾れとも知らですすす日も

胸にやどれるすがたには

血管にとほり心に入り

深く心の奥がきに

ひそめる潔き緒琴にも

ふれつたづよき力もて

なべてつかれをよみがへす」

物我のけじめわするまで

たのしき感にうたれつゝ

あはれやさしきこの感動

いみじき愛のこのうごき

思ひみるさえなかくに

名づくるすべもなかりける

このいさゝかのはたらきは

思へばこれぞ人生に

やがて尊とき助けとは

なりてゆくらむこの感」

またわれさらに思ふなり

けだかき姿よそほひし

天はめぐみのたまものを

賜ひくだせしものなれば

そは不思議なる世の中に

神秘をこめてあるなれば

分き入りがたきものなれど

幸あるれのが心もて

進みてゆかばいかばかり

たのしさまさるとならん」

かゝるしづけき幸はある

心をもたば愛情は

身體をかよふいきのねも

血くだをつたうはたらきも

深き洗みにうちしほれ

眠のうちに身をなぐる

つらさがなかにあるとでも

活ける精神を呼び起し

諧和の力よるこびの

つよき力に眼も光りて

物にやどれる生命も

つき射るまでに蘇へる」

若しやこれらの信念をば

わたなることと思ぼするか

さはなしさなくしては

いかに小闇く鬱もる、

境のうちにうちなげき

激しさをしげきなかにたち

つらさうれひにとどされつ

世のさが多きあらなみの

心のを琴にかゝるとき

いかにしばし精神にて

「おは、ワイ川の澤なる

森の守りの女神よと

汝に向ひて呼ばふべき

森のあなたを彷徨へる

汝をばわれの精神にて

向ひ廻さであるべきか」

とは云ふものゝわがむねの

憶えの力おぼろげに

今はかすかになりはて、

想にあまる片影は

つもるうれひにさえられて

半ばさえゆく心地すも

たいかくこゝにたてるまに

むねにささみしえすがたを

再びこゝにかへし見む

なれどたいかくたてるまも

われは刹那のよろこびと

思ふをなし此の間にも

未來つきせぬ永劫も

此の生命とむくろとは

かくもこゝにとながらへて

ありけるものと思ふなり」

さはれわが身のたしなみに

昔はこゝの小山こえ

峰ふみわけてさ男鹿の

深き山邊の水さびみ

さびし流れによりそひて

心のまゝにかけめぐる

風情はやがてにたりしに

今は昔に愛したる

物と思ひし心もて

恐るゝものと思ひなす

世の人々の心にと

殊なく變るわが身かな

なれど自然に向ふたび

自然はいつもわれにあり

(わらべの折りの粗朴なる

小鹿ににたるふるまゐに

うちよろこびしさまなくも)

よしわれありしいにしへを

かくにしぬびすなりたれど

響きたえせぬ瀑つせは

脈うつごとくかゝりきつ

山にかゝれるたかき巖



深くしげれる森の影

造化に對ふ愛と慾

感じはつねにわれにあり

わがうつくしと感じ入る

思ひのといく其の極み

けじめをたえず智慧とても

物見る眼からずとも

おはれされどもかゝる日は

すぎてむかしの夢のあと

こらへかねたる歡喜も

眼くるめさし悦情も

今はきたらずなりにけり

されど今猶は造化婆は

憂さやつらさに此の身をば

そぎたまはぬぞうれしけれ

われかくうけしいにしへの

愛の力の賜を

今うすとてもつぐのひに

澤なる恵たまものを

享けえたりとは信ずなり

幼き時の考がへる

力のあらぬ時ならで

われは造化を觀ると云ふ

思ひに今はすゝみけり

世の人々の沈みたる

つらさ心のこねをば

幾たびわれはさくとも

かの信念の大ひなる

力にいつかはだされて

心ゆたかになぐさめつ

胸の激しき荒なみも

たえて風ぎけりわが心

たゞにそのみならずして

たかき思のよるこびに

撲たるゝまでにうごかされ

深く幽かに何事も

けだかき美念に注がるれ

かくと感ぜしその底は

かいやきわたる夕榮や

地球をめぐる大洋も

活さくしたる大氣をも

緑一碧の大空も

人の奥にとひめてふ

活ける精靈の力をも

物考ふるはたらきも

物我の上にはゆきわたる

すべて思想の基にまで

隈なくこゝにかゝるなり」

さればわれらが幾歳も

牧場や森や山々を

わくとぞなくめづるなれ

この緑りなる地の面より

わが目の前に見ゆるなる

なべてのものにわくがれて

さときわが眼とさとき耳

みつさゝつする大ひなる

世界のものはやがてみな

われらを遠く覺り看る

半ば造化の身をやとし」

かくて造化のふところ

認められたる喜びの

感一線の聲ねこそ

わかきようなる思考への

水なれ棹とも乳母とも

心導く人なるか

善きに誘ひてわやまらぬ

守護神とこそ見ゆるなれ」

若しやわが身がかくまでに

汝れに誘はれてなかりせば

わが爽かなる精靈も

哀しき淵に沈みはて

浮ぶ瀬なくて終りけむ

されど汝はうつくしき

この川の邊にたゞつみて

吾れと一つに存在へて

ありしゆゑにと思ふかな」

わはれ汝は吾にとり

いとしさたえぬ友なるよ

あゝいとしいあゝいとしい

いとしさまさるわが友よ

汝れの響きを今さくも

われは昔しの胸のうち

ひめおきたりし其の聲と

心にいたく思ふなり

なれの涼しき眼より

射りさす光りそのうちに

昔しながらのよるこびを

したしく胸によみゆきて」

あゝ、われしばしなりとても

昔しありにしわが影を

「女の姿のそのうちに

見まほしゝとも思ふかな」

こひし戀しの我妹子よ

造化はたえていたづらに

愛づる心をあざむかぬ

汝と深くも覺るかな

此れぞわがなす誓かも」

わが一生の年つきを

喜悅に出でゝ喜悅にと

誘ひてくるゝなれの徳

仰ぎ見るこそ尊けれ」

さすか造化はわが心を

勵ますのみか柔和なる

麗はしさもて動かしつ

高き思を養ひつ

悪魔の舌にかゝりては

浮きし決定をなさしめず

我慾の人もさげすまず

輕薄ものゝ群へとは

慈けをそこにかけしめず

げにながつよき力には

その日其日の生活の

うらさびれたる「交際」も

摧くをうるかさてもまた

神にまかせし信心の

幸いと多き賜ものゝ

それにはみちてありと見ゆ

其の心をばたぞありて

摧きたむころものありや」

されば月影おのづから

ひとりわゆみてそのうちに

ささくさやかにてりてあれ

狭霧こめたる山のはに

ふき渡りゆく風もまた

この河沿をすぎてふけ」

やがて年月たちもせば

あからさまなる狂喜すら

謹嚴まざる悦情と

熟りゆくらむ汝か心

汝か心もかくてまた

愛でたきものゝ宿りとも

なりゆくとのありもせば

なれが記憶の底のうち

奇しき聲わねや色どりの

すみかところをはなるならん」

わはれそれとも汝ひとり

かなしくつらく恐ろしき

痛ましさとにいだかれて

やるせなきとありもせば

をとなしやかの喜の

思をいかにみつとも

いやす思をとめをきて

わが誠戒しそをもちて

思ひかへせよわがを」

たとひわが身はそのそばに

あらずなりゆきなが聲は

きゝえずなるも汝れが身の

わからさまなる眼ざしに

過ぎし世ぶりの係を

捉ふるすべもたえはてば

汝はかならずこの川の

うれしさまさる水きわに

わすれやすらひ吾がことを

われと汝れとの兩人して

たらしむかしの姿をば

かくよし汝はなるとも

われひとりにて造化婆の

歸依者となりて未ながく

仕へまつらむそのために

つかれせぬみとかへりみつ

いなわれむしろかく告げん

はぢらひ顔にうすべにを

させし乙女の戀ごゝろ

それにもませし眞直なる

はるかに遠き且つ深き

熱き心をはこばして

戀しく訪ふてたづねこん

かくせばなれも忘るまじ

年月ながくとつくに、

跡さだまらぬ客となり

露宿風婆たえまなく

よそにわが身を置くととも

かくせば縁りしたゝる、

牧場の景色わがための

唯ひとつより外になき

いとしきものとなるのみか

汝れがのぞみのあてども

はた造化婆の身となるも

こよなき幸はなかるらめ

(Jury 13, 1798) (大尾)

甲府に行く道にて

東 牧 羊

百千歳かはらぬ不二の大み山

汝よ鏡よやまとごゝろの

鶯

湯川たき子

わさばらけ野邊の鶯梅が枝に

よをこめてなく聲ぞにはへる

堇

われはてしかきねのすみれ匂ふなり

摘みて歸らむ春のかたみに

フレーベル會俳句端書集

一、課題 春季雜吟 一人十句以下

一、締切 二月二十五日限り

一、披露 明治卅八年四月發行本誌文苑欄

一、賞品 天地人三座には美景を呈す

一、撰者 當分本會の撰とす

一、投稿 本誌購讀者は何人にても投吟する事を  
得用紙は繪葉書に限り(眞筆刷物隨意)

住所氏名雅號を明記し必らず左の名宛  
にて送らるべし。

埼玉縣入間郡芳野村

フレーベル會俳句掛

鹽野奇零宛

第七回俳句端書集

明ける夜に氷を叩く隣かな 長野 飯塚 曉震

夜や寒み燈火くらき木賃宿 全

霜置く煙る焚火の普請小屋 全

沈没の橋懐し冬の月 仙台 立花 一瓢

風や浮雲そらにも柿一とつ

同

積む榎木も圍の中や冬籠り

同

月の雪人住む世とは思はぬ

陸奥 花村 曙山

山の端に残んの月や霜の橋

同

冬の日や今日も曇り夕暮る

同

袴着や養ひ君の大人振り

東京 藤置ゆかり子

大雪も初めはちらり／＼かな

本所區 久米 辰子

匿名で呼ぶ落胤や櫓の宿

同

思ひなやむ人の愚や大三十日

同

入口も落葉にふかき在所か

武蔵 月田 一甫

牛叱る聲にも見ゆる師走かな

小石川區 平岩 學洋

寐返りの度毎に知る霜夜かな

同

大佛の鼻の穴にも氷柱かな

同

大雪の朝や山根に立つ煙

常陸 落花庵

今少しはしき師走の日脚哉

同

風呂吹や坊が自慢の味噌加減 越後 正木 静江

から風の上に冴けり峰の月 豊前 金子 琴月

朔らを眠りも醒す晝の木兎 同

うれ残る豆腐の桶やうす氷 甲斐 野口 豊雪

寒垢離の心貫く姿かな 同

河豚汁や胡座かゝる味も出せ 下野 秋山 春水

待朝は空ばかり見る時雨かな 同

解けかゝる氷の上や残る鴨 岩代 荒木 柳江

兎狩りて麓に來れば小雪かな 大和 津谷 柏山

穴熊の出で、打たる、吹雪かな 同 浅見 秋夢

餧と無酒病の人の病ひかな 同

風や夜明に高さ月一とつ 東京 久保 狂水

市ひけて人聲もなし冬の月 上總 高橋 波月

炭一駄賣りて師走の用意哉 同

さぎ一羽時雨て戻る芦間かな 上野 加藤 よし



まだ咲かぬ梅の下掃く冬至かを

同

暮知らで居るか雪野の夕鳥 相 模 樂 山 人

提灯に別れて廣く雪の道 遠 江 西 村 三 省

風の子の交りて寒さ炬燵かを 信 州 今 井 一 舟

水溜て漁村の柳まばらなり 芝 區 井 上 さ よ 子

三 光

天、氷る夜や路次へ消え行く下駄の音 藤 置 ゆ か り 子

地、遠征の身の思はるゝ寒さかな 月 田 一 甫

人、佛今桶へ入れたり鐘氷る 久 米 た つ 子

追 加 無 一 庵 奇 零

いつもく悔てすぢしぬ年の暮

辻店の今川焼や夜の寒さ

寒き夜や九尺二間の手内職

道すがらの感

久保やま子

私は日本内地で度外視せられて居ります九州の  
 西南陲、日向の國に居る者で御座いまして何も存  
 じませんから、唯雑誌や會報で僅に皆様の御安否  
 を承りましたり御旅行日記や御秀逸を向ふが唯  
 一の快樂なので有ります、隔年位には必ず出京も  
 致しますが、ほんのある一部の御方々を御訪問申  
 位、何か年來の御禮としてお土産もがなと存す  
 が、切田舎は土嗅き御談ばかり皆様の御耳を煩す  
 様な事は更にないで困りました、  
 扱此度の出京は少し例外の道を選択びまして土々  
 呂と申小港より神戸には参りませんで豊后地に上  
 陸迂廻して筑前筑後地に入寄り所用を便じまして  
 東上の途に就き九鐵より山陽線東海線と移りく

まして近州地にかゝりましたのは、丁度郷里を出てから八日目、元來が船も車も不得手の私、殊に時局柄として唯獨り今年七歳になりませう惡盛りの男子を携へての旅の事ですから、心使も一層多く身にしみ／＼と旅の疲勞を感じました、近江の米原驛は乗り込みました列車の終點を幸ひ暫く旅店に休息して、後發列車の着を待つことに致しました。

午後三時になりませうと後發列車は笛聲と共に勇ましく着車致しました、丁度軍隊の輸送頻繁の折で驛員は眼を眩す計り、乗客も客車の減少せしたため常に倍し、其混雜謂んかたなく漸くにして乗りは降りましたが中途より飛入ですから列車中の人波に動搖れ身体を置くべき處を見出しかねました。太陽は既に地平線下に没する頃になりましたので

先乗の客は毛布を擴げ華胥に遊ぶ用意に忙はしき様のもあります、同じ權利をもつ乗客ですが此の様になりました時は全く修羅の街、老幼婦女子は片隅に縮まつて居らねばならぬ有様、誰所理するものも御座ませぬので、先客の專横も随分甚しう御座いました、私の起て居ります側の腰掛に五十余のお婆さんと、十七八才位の娘さんが、今しも悠々と人に取りられぬ様にいやに腕を伸して毛布を擴げて居ります、丁度よいと私は何處までお越し遊べませう混雜には困りましたとぞ少し子供をおかけさせ遊してと云ふを打けし、横濱迄参りますの永の旅ですからお氣の毒様ですがと、獨り得顔に席を譲らふとも致しませんでした。其時に嗚呼と獨り身なら終宵立往生も物かは、遼東や滿州の野に露營せらるゝ我が忠勇なる軍隊の將士に比べ

なば然りながら頑是なき幼童はやがて睡眠を催すべし、今少し幼なくば背負ひも侍られんはたいかいせん」と殆と途方にくれて忙然として起て居りました一刹那、此處にお掛けなさいこんな時は皆一所がよいとの天の美聲は突如として背後に響きました、地獄で佛に逢ふた様な氣がして振り向きますと、鼠色の着物に鼠物の衣を召した坊さんが珠數を爪繰りながら清淨な白毛布を擴げ、籠末でさがさー此れにと謂はれましたので、恐れ入りました、誠に有難ふ存ますと一禮して毛布を少し傍へにやりければ籠末ですが此儘にとの坊さんの詞にさらばと子供を抱き舉げました、するとあなたもといはるゝにまかせ腰を掛けました、すると先のお婆さんの足が私の膝の處に丁度さはりますのでさすがのお婆さんも氣の毒と思ひましたかそろゝ

と足を縮め始めたので御座いました、それから私が携帶品を網棚の上に揚げたらばと存じまして、仰で見えて居りました、そうすると坊さんは直ぐ起て自身の革包を取り卸されたので、私はなんともお氣の毒で居たゝまれぬ様に存ました、すると坊さんがあなたは何處まで御出と問われましたから、新橋迄と申しますと、私も新橋迄ですか、今夜は岐阜邊で泊る積りです、さーあなたのをと謂はれました、其後子供が幾度も〜車窓を開閉して困りますから、止めましたら、坊さんが子供は致し方がない、止めてはよくないとて、幾度か自身に開閉の勞を採られしました、夜と共に乗客は減するで有らふと思の外、停車場毎に反て増加し、遂に立錐の余地も無き迄に至りぬる折しも、六十余りのお爺さんが蹠跟して起て居るのを見ま

すと、坊さんは突然起てお爺さんお掛けなさい、此處にと申されました、するとお爺さんは喜び涙を流しながら恐縮で御座います、貴僧が左様になさつて下さいましてはと辭しました、すると坊さんはでも私はあなたより若い者と微笑されました。左様致しますと、今まで黙して居た側の若い坊さんが私ごと起ちました、すると先きからの坊さん、左様か前前は私より若からとて座に就れました、此活劇を見たり聞たり致して居りました列車中のお客は何と思ひましたか、今迄で横臥して居た人は坐し、坐して居た者は腰掛けとなり、互に少しづつ、席を譲りましたから、前の修羅道は忽ち變じて天上界となり、幼者は鄰客の膝を枕に安眠し、老者は其保護を悦んで隨喜の涙を禁じわへぬ有様となつたので御座います、聖人が、徳孤

ならず必ず鄰ありと申されたのは此の事だろふと存ます、列車中幾十の人は必ず此の無聲の説教に幾何かの刺激を感じたらふと存ます、何卒私達も（フレベル會）此坊さんの様に寄り／＼無聲の説教を致しまして、社會の腐敗を刺激致したいものだと存ます。

昨春出京致しました時と本年とは女學生の体格なぞも余程宜しくなりました様に見受けられますが、随分今日の女子教育社會はまだむづかしく進歩すれば進歩するほど、善評に伴ふ惡評も受けねばなりません様な都合に成りゆきますから彌無聲の説教が肝要だと存ます、私は此の無聲の説教に今更の様に感じましたから一寸御紹介申上ます此坊さんは武田芳淳と云ふ方で、浄土宗中錚々のお方だそふで御座います、此度の旅行は時局柄です

から随分多趣味御紹介申上たけい事も澤山御座いま  
したが、筆か廻りませんから他日又申上ると致し  
ましよう左様なら。

此の行中高山彦九郎の墓に參て

君ませし百幾とせのそのかみを

手向の水にくみてこそしれ

家庭とは何ぞや (答を募る)

家庭といふ言葉は、近頃になつて著るしく人の注  
意する所となりました。そして此家庭といふ言葉  
は極近頃になつて出来たので、多分英語のホーム  
といふ語に相當するのでせう……、で、

家庭とは何ぞや

といふ問と設けて、家庭の意味を極簡明に表出す  
るのは、極めて面白い許りでなく、又所謂、家庭

生活を營んで行くに頗る必要なと、考へますか  
ら、こゝに廣く、之についての答を募ります。左  
記の條件御承知の上で、何卒、續々御贈附を願ひ  
ます。

一、用紙は端書、文句は成るべく簡短なるを要  
す

一、氏名は匿名にても宜し

一、期日は來二月十五日まで

一、答案の優等と認められた方三名までに粗品  
を呈す

一、答案は左記の處宛て御發送のこゝ

東京下谷區竹町一番地 東 基 吉

一、答案は多い程宜しいから、讀者に限らず何  
人でも答へられます

尙、参考のため、次に、外國に見えたる、面白

文句の一二を掲出しませしよ。

Home : A world of strife shut out, a world of love shut in.

争鬭のしめ出され、愛のしめ入れられたる場所、

Home : The father's kingdom, the mother's world, and the children's paradise.

父の王國、母の世界、而して子供の天國、

Home : The place where the small are great, and the great are small.

小なる者は大となり、大なる者は小となる所。



## 保育者のため

### 幼稚園案内

東 基 吉

#### 一、遊戯(つぐみ)

さて、遊戯が子供に取つて、どんな功益があるかといことは、前に記述しました通り、そこで、幼稚園保育の本旨といふものは、つまり、遊戯以上の功能で以て、子供を教育しようといふのであります。学校の教育は、大体、知識を授ける方法で教育するのであるが、學校へ行く前の幼児であつて見ると、まだ、知識を授けるには早い、そこで、其時代の幼児の教育は、どんな方法でやるかといふと、即ち此遊戯でやつて行かうとするのである従つて、遊戯といふものは、幼稚園保育の眞髓で

あります。勿論、其他に唱歌もやらせる、手工もやらせる、談話も聞かせる。然し、それ等は、子供が遊戯で疲れた休憩時間にやる位のもものと見て差支ないのです。だから幼稚園では、子供を面白く遊ばせれば宜しいので、其他には何もないのである。

但し、此子供を甘く遊ばせるといふ、其甘くといふのに味がある。たゞ遊ばせる丈けならば、そこいらの子守りにでも出来るであらふ。幼稚園では、甘く遊ばせなければならぬ。即ち、前に記した遊戯の功能といふものを十分に理解して、いつもく其効能を子供に得させて行く様に遊ばせねばならぬ。語を換へれば、眞に遊戯をして教育的ならしめる様にして行まねばならぬ。夫は、とても、子守りや何かでは出来る事ではない。否な一般か

らしいと、小學校や女學校の先生のやる仕事よりは餘程面倒なものになつて來るのである  
(つづく)

雜報

女子宗教學會

本月五日より毎日曜日一時より三時半まで題號の講演は神田錦町二ノ六女子商業學校内に開かる(四回完了聽講料四十錢)講師は加藤玄智、他井上松本博士等の講演あり。一般の志潮、漸く精神的に向へる今日、好個の開催といふべく、其趣旨は左の如し。

日々に新して又日に新なる我邦文明の潮流は、今や漸く物質的の地位を脱却して、精神的優位に趨進し來たり。是に於てか曩に一

度一部の人に依りて高閣に束ね去られんとしたる宗教も、今は普く人生には必ず缺くべからざる者なることを深く確認せらるゝに至れり。然り宗教は實に人性が特有せる最深最奥の要求にして、又精神的生活の最後の慰撫者、將た奮勵者なり。然も奈何せん其の理極めて幽玄なるを以て、其の眞意を捕捉すること甚だ難く、往々、人をして無限の煩悶苦惱を懷かしむるあるを。矧んや戦時、人心宗教を求むること極めて急なる今日に於ておや。

惟ふに宗教や其の數管に百のみならず、優秀高下、種類萬差、隨ひて自他の爲に寧ろ不幸を來たすが如き者も亦甚だ尠からず。然り而して其等各宗教の價値を判定し、眞相を發揮し、以ておのづから人をして最高圓滿の宗教に至らしむる者は、實に宗教學的智識其者を措きて又他に求むべからざるなり。

勿論、宗教に關する科學哲學の盛なる今日、高等専門の學校に在りては、往々其れが講座を設け、男子は多少其の恩恵に俗しつゝありと雖も、彼の其の資性尤も宗教心に富める處の女子に至りては獨り未だ全く聽講の自由を有せず。將た目下、日夕公開せられつゝある處の夫の宗教上の幾多の講演も、多くは智的方面の疑問を全然蔑視せる者か、然らずんば男女全席の講筵にして。前者は教育ある者に向ひて不満足之感を懷か令め、後者は女子をして出席聽講するに躊躇せ令むる者あり。是れ洵に女子、就中教育ある婦人に於て尤も遺憾とする處にあらずや。

是れ吾人が身の不肯を省みず、茲に斯會を立て、以て特に女子に限りて、公に宗教の學術的講演を開かんとする所以なり。

冀くは江湖の諸姉、吾人が意の在る處を諒として、奮ひて來聽あらんことを。

## 紹介

### ▲をさな繪端書

可愛い子供等の遊び盛りを書いた美しい繪端書六枚一組で十五錢。繪も印刷も紙質も見事に出来たり。子供好きの方は買つて御覽。

(大阪市島町天真堂發行)

### ▲みどり 一ノ一

一面には女性の修養改良に資し、一面には大に女性の詩趣を發達せしめんと目的を有する愛すべき雜誌にして伊勢國稻生村敬愛婦人會より、本年一月發行せるもの誌中、愛すべく誦すべき短歌美文多し、將來健全の發達を望むるものなり。(一冊五錢)





入 會 三十七年十二月ヨリ  
三十八年一月ニ至ル

本郷區追分小學校

紹介岩本金太郎

乙訓 調助

相州三浦郡浦賀町走水海軍總帶所内

紹介後閑菊野

村山 もと

石川縣鹿嶋郡中ノ島字向日

紹介成田ひさ

青山 初重

神戸市磯上通り善憐幼稚園内

紹介立花せん

長沼 きみ

仙臺市元寺小路百十一番地

紹介 全上

小野 ふみ

仙臺市北二番町八十番地

紹介 全上

宮澤 たまき

仙臺市裏五番町四

紹介 全上

武田 たつ

仙臺市長刀町七

紹介 全上

増澤 なみ

山形縣酒田本町三丁目

事務所申込

青木 まさ

同 青木 あい

日本橋區堀江町二ノ七

全上

石山 春惠

神田區永富町七

紹介妹尾 明

柄越 さわ

芝區西久保櫻川町一〇

全上

高木 すみ

青森縣弘前市幼稚園

紹介小西壽美

今 きよ

芝區神明町二一伊東松太郎方

紹介野口ゆか

福田 てる

神戸幼稚園

紹介大山千代

頓野 きよ

堺市絲西尋常小學校

紹介榎本つね

堀口 みつ

神戸市聖家族幼稚園

紹介奈良良あい

戸田 ふじな

同

紹介榎本つね

南枝 ちよの

仙臺市東二番町百四十八番地

紹介 全上

山内 かづ

京橋區築地島海小學校

紹介立花せん

笹野 豊美

女子高等師範學校

神田區通新石町廿番地下嶋庄一郡方

班務所申込

樋口きつ

四ッ谷區本村町三十九番地

紹介大橋いぬ

中村 緑野

四ッ谷區南伊賀町四十五番地

全上

湯 淺きみ子

栃木縣足利町足利幼稚園

紹介青山孝子

堀 江、蝶子

茨城縣水戸高等女學校寄宿舎

紹介松村 久

道 口みち

兵庫縣揖保郡龍野幼稚園

事務所申込

齊 藤たき

轉 居

北海道札幌區一條西十丁目一

長野縣師範學校女子部

横濱市西戸部町五百三十二

本郷區駒込蓬萊七 水田方

神戸市山本通り五ノ四十七番屋敷

小石川區戸崎町五、三宅方

廣嶋市平塚町二十九番地え〇一

神奈川縣立高等女學校

井 口えね

瀧 山 幸

佐 藤 壽 鏡

新 海 ふみ

久 保 やま

服 部 綱子

宮 本 てる

神奈川縣橋樹郡生見尾村麥松原

東京市芝區本芝四ノ十七藤澤風雄方

愛媛縣喜多郡大州町九三九

下谷區中根岸御行松前

岩代國郡山字壇場半田敬置

神田區柳原町一八勢國屋方

名古屋市主税町二ノ十六

函館港元町九番地佐藤清造方

丸龜市北手山町五十二

牛込區新小川町一ノ五川上方

大坂市東區東雲町三ノ二五二

長崎縣高等女學校

大坂市西區薩摩堀裏町三番邸

京都市東堀川通り丸太町下ル

千葉縣教育會女子寄宿舎

四ッ谷區坂町六十五

大分縣大分町幼稚園

尾道市天寧寺上

京都聖護院町七高橋清一方

臺灣恆春猪膽東國語傳習所

仙臺市光禪寺通三十二番地小島方

神奈川縣三浦郡豊島町深田六十番地

大分縣大分高等女校

小松 ちか

藤 澤 鼻 月

清 家 みすゑ

淺 野 蝶

内 藤 さく

相 川 のぶ

磯 山 綱子

松 岡 幸

關 口 たけよ

脇 山 まさ

林 富 美

杉 村 まつ

桑 原 いはお

山 下 とみ

石 井 しげ

鈴 木 たけ

阿 部 いノ

坂 井 ヌイ

高 橋 さき

小 野 田 みほ

原 ちかじ

高 木 梅子

高 木 まつ

和歌山市上野町三丁目二番地  
佐賀縣師範學校

中島雪枝  
川島庄一郎

會費領收

(自明治三十七年十二月二十二日  
至明治三十八年一月二十五日)

金額	年月日	姓名
二五〇	三六、二—三八、二	嶺 ぎく
一八〇	三六、七—三七、一二	井上 半介
二〇〇	三七、三—三八、一〇	吉田 ハル
一二〇	三七、二—三八、一一	堀口 みつ
六〇	三七、一〇—三八、三	吉澤 とも
二〇	三七、一一—三七、一二	武井 綱枝
二〇〇	三六、九—三八、四	平木 たき
六〇	三八、一—三八、六	松村 ひさ
二〇	三八、一—三八、二	雨森 劍
二〇〇	三七、一—三八、八	野副 とよ
一〇〇	三七、二—三七、一一	島雄 益造
一〇〇	三七、五—三八、二	伊庭 なほ
一〇〇	三七、三—三七、一二	安藤 さつ
一五〇	三六、一〇—三七、一二	安藤 さつ
三〇	三七、九—三七、一一	満岡 さよ
五〇	三七、七—三七、一一	玉尾 こま
五〇	三七、七—三七、一一	小関 すて
五〇	三七、七—三七、一一	浅井 はつ
五〇	三七、七—三七、一一	保科 修

五〇	三七、七—三七、一一	岩山 よね
五〇	三七、七—三七、一一	笠井 梅野
五〇	三七、七—三七、一一	野村 すき
五〇	三七、七—三七、一一	田村 かづ
五〇	三六、一〇—三七、二	櫻井 光華
五〇	三七、七—三七、一一	佐藤 操
五〇	三七、七—三七、一一	永地 待枝
五〇	三七、七—三七、一一	岡山 秀吉
五〇	三七、七—三七、一一	竹澤 さと
五〇	三七、七—三七、一一	岡田 千代
五〇	三七、七—三七、一一	佐藤 むめ
五〇	三七、七—三七、一一	澤 ぬめ
七〇	三七、五—三七、一一	近藤 茂
七〇	三七、五—三七、一一	多田 きう
七〇	三七、五—三七、一一	山田 系
三〇	三七、九—三七、一一	矢野 房代
三〇	三七、九—三七、一一	菊池 徳次郎
五〇	三七、七—三七、一一	大和田 りょう
五〇	三七、七—三七、一一	龜岡 伸
五〇	三七、七—三七、一一	清野 くに
五〇	三七、七—三七、一一	津原 ちか
五〇	三七、七—三七、一一	平山 よね
五〇	三七、七—三七、一一	石川 こね

二六〇	六〇	五〇	六〇	八〇	四〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇	七〇	五〇	五〇	五〇	五〇	五〇
三五、一一—三七、一一	三八、一一—三八、六一	三七、七—三七、一一	三七、六—三七、一一	三七、四—三七、一一	三七、八—三七、一一	三七、七—三七、一一	三七、七—三七、一一	三七、七—三七、一一	三七、七—三七、一一	三七、七—三七、一一	三七、七—三七、一一	三七、七—三七、一一	三七、七—三七、一一	三七、七—三七、一一	三七、七—三七、一一	三七、五—三七、一一	三七、七—三七、一一	三七、七—三七、一一	三七、七—三七、一一	三七、七—三七、一一
松岡みち	太田とめ	藤井しげ	小具貞	高木基子	西村きしえ	石井國次	羽田幸	榊山常	内藤いね	古市静	藤村系	古市幸	小林徳	大野朝比奈	橋本はな	柴田ちた	新開みえ	鳥居しげ	武田まつ	佐藤つや
京	な	つ	な	京	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な	な

一五〇	一二〇	三〇	三〇	一三〇	一三〇	一〇〇	二〇〇	三〇	一〇	一〇〇	一二〇	一〇〇	一〇〇	一七〇	二二〇	五〇	一〇〇	二〇〇	一五〇	六〇	一五〇	三〇〇	
三六、一〇—三七、一一	三七、一一—三七、一二	三八、一一—三八、三	三八、一一—三八、三	三六、一一—三七、一二	三六、一一—三七、一二	三七、八—三八、五	三六、一一—三八、七	三八、一一—三八、三	三八、一一	三七、五—三八、一二	三八、一一—三八、一二	三七、八—三八、五	三七、八—三八、五	三七、九—三八、一一	三七、二—三八、一一	三七、二—三八、四	三七、六—三八、三	三七、六—三八、一	三六、九—三七、一一	三七、七—三七、一二	三七、七—三七、一二	三六、二—三七、四	三五、六—三七、一一
久場つる	小野田みほ	菅野きし	原ちかじ	田中八重	安野なか	鈴木はるえ	松村貞	土屋たまよ	根来まさえ	高木梅	桑邸ます	井口よね	勝田のぶ	岡本よし	堀口みつ	柳川まつ	中西つる	高橋サキ	坂井ヌイ	岡本えん	高桑たま	服部繁子	

三九〇	三四、一〇—三七、一二	小笹文藏
七〇	三七、一二—三八、六	村山もと
六〇	三八、一—三八、六	堀江蝶子
二〇〇	三七、七—三九、二	吉田幸
七〇	三七、一—三七、七	岩月せつ
二〇〇	三七、六—三九、一	關しむ
六〇	三八、一—三八、六	中島雪枝
一四〇	三六、一—三八、一	志村みき
二二〇	三八、一—三八、二	上野かく
二二〇	三七、八—三八、七	橘本ひさし
二〇〇	三七、五—三八、二	菊地のりよ
二二〇	三八、二—三九、一	立野たが枝
二二〇	三八、二—三九、一	脇野ついで
二二〇	三七、一〇—三七、一一	波佐谷み枝
一〇〇	三七、八—三八、五	富田八千代
二二〇	三七、一—三七、二	萩野しるか
二二〇	三八、一—三八、二	齋藤たき
七〇	三七、六—三七、一二	大川多枝
一〇〇	三七、七—三八、四	足立たか
六〇	三八、一—三八、六	小野義倫
三〇	三八、一—三八、三	湯淺きみ子
一〇〇	三八、一—三八、一〇	中村縁野

フレイベル會規則

- 第一條 本會ハ幼児保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第二條 本會ハフレイベル會ト稱シ東京ニ置ク
- 第三條 會員タルラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼児保育ニ篤志ナルモノニシテ會員ノ紹介チ經ベシ
- 第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一月月並拾錢ヲ贈ルベシ
- 第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルヘシ
- 第六條 本會ノ目的ヲ達センガ爲ニ左ノ事業チ行フ
- 一 總會、毎年四月二十一日之ヲ開キ保育ニ關スル演説、談話、保育參列品幼児成績物展覽會、會務ノ報告等
  - 一 選舉等チナス會日ハ會長ノ意見ニヨリ之ヲ變更スルコトアルヘシ
  - 一 常會ノ毎年二月、六月、十月、十二月ノ第一土曜日之ヲ開キ保育ニ關スル演説、談話、協議、實驗等チナス
  - 一 組合會 會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスル者チ以テ組織ス但シ別ニ組合會規約ヲ定メテ會長ノ承認チ經ルモノトス
  - 一 雜誌發行 毎月一回雜誌ヲ刊行シ之ヲ會員ニ配布ス
  - 一 前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件
- 第七條 本會ニ左ノ役員チ置ク
- 會長 會務ヲ總理ス
- 幹事 一人 會務ヲ輔佐シテ會務ヲ掌理ス
- 評議員 若干人 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス
- 第八條 會員ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス
- 第九條 主幹ハ會長ノ特選トス
- 第十條 幹事ハ會員ノ互選トシ其任期チ二ケ年トス但シ毎年半数チ改選スルモノトス
- 第十一條 評議員ハ會長ノ特選トス
- 第十二條 本會ハ必要ニ應ジテニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ルヘコトアルベシ
- 第十三條 此規則ハ會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラザレバ變更スルコトヲ得ス

# 最良の女子學校習字科用書

女子高等師範學校囑托 岡田起作先生に編書

## 文部省檢定

高等女學校習字帖

全四冊 自卷一至卷三 各金十五錢  
卷四金十八錢 郵稅各金二錢

女子習字帖

全四冊 卷一、十錢 卷二、十一錢 郵稅各  
卷三、十二錢 卷四、十五錢 金四錢

からすまる帖

全二冊 上卷金十八錢 郵稅各金四錢  
下卷金二十錢

大井川行幸の序

全一冊 定價金十六錢 郵稅金二錢

女子書翰文

全二冊 上卷金廿五錢 郵稅各金四錢  
下卷金廿八錢

右は先生が多年の經驗に依り編書せられたるものにして既に各府縣の高等女學校并に女子師範學校に教科用書として續々採用の榮を蒙り好評噴々たり

古今和歌集序

全一冊 定價金二十錢 郵稅金四錢

最新刊 眞筆千字文

全一冊 正價金二十錢 郵稅金四錢

發行所 東京日本橋區小石町貳丁目 金昌堂 支店 東京日本橋區小石町壹番地 金昌堂 支店

リ七領受ヲ牌賞等壹第テ於ニ會覽博國內回五第ハ琴風製葉山

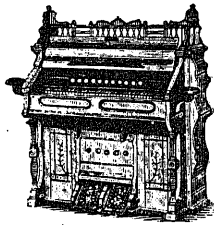
明治三十四年二月廿八日第三種郵便物認可



山 葉 製 風 琴

（附 險 保）

- 壹號 形金拾六圓五拾錢
- 貳號 形金拾六圓五拾錢
- 參號 形金拾七圓
- 四號 形金拾八圓
- 五號 形金拾八圓
- 六號 形金拾九圓
- 七號 形金拾九圓
- 八號 形金拾九圓
- 九號 形金拾九圓
- 十號 形金拾九圓
- 第一號 形金百圓
- 第二號 形金百圓
- 第三號 形金百圓
- 第四號 形金百圓
- 第五號 形金百圓
- 第六號 形金百圓
- 第七號 形金百圓
- 第八號 形金百圓
- 第九號 形金百圓
- 第十號 形金百圓
- 第十一號 形金百圓
- 第十二號 形金百圓
- 第十三號 形金百圓
- 第十四號 形金百圓
- 第十五號 形金百圓
- 第十六號 形金百圓
- 第十七號 形金百圓
- 第十八號 形金百圓
- 第十九號 形金百圓
- 第二十號 形金百圓
- 第二十一號 形金百圓
- 第二十二號 形金百圓
- 第二十三號 形金百圓
- 第二十四號 形金百圓
- 第二十五號 形金百圓
- 第二十六號 形金百圓
- 第二十七號 形金百圓
- 第二十八號 形金百圓
- 第二十九號 形金百圓
- 第三十號 形金百圓
- 第三十一號 形金百圓
- 第三十二號 形金百圓
- 第三十三號 形金百圓
- 第三十四號 形金百圓
- 第三十五號 形金百圓
- 第三十六號 形金百圓
- 第三十七號 形金百圓
- 第三十八號 形金百圓
- 第三十九號 形金百圓
- 第四十號 形金百圓
- 第四十一號 形金百圓
- 第四十二號 形金百圓
- 第四十三號 形金百圓
- 第四十四號 形金百圓
- 第四十五號 形金百圓
- 第四十六號 形金百圓
- 第四十七號 形金百圓
- 第四十八號 形金百圓
- 第四十九號 形金百圓
- 第五十號 形金百圓
- 第五十一號 形金百圓
- 第五十二號 形金百圓
- 第五十三號 形金百圓
- 第五十四號 形金百圓
- 第五十五號 形金百圓
- 第五十六號 形金百圓
- 第五十七號 形金百圓
- 第五十八號 形金百圓
- 第五十九號 形金百圓
- 第六十號 形金百圓
- 第六十一號 形金百圓
- 第六十二號 形金百圓
- 第六十三號 形金百圓
- 第六十四號 形金百圓
- 第六十五號 形金百圓
- 第六十六號 形金百圓
- 第六十七號 形金百圓
- 第六十八號 形金百圓
- 第六十九號 形金百圓
- 第七十號 形金百圓
- 第七十一號 形金百圓
- 第七十二號 形金百圓
- 第七十三號 形金百圓
- 第七十四號 形金百圓
- 第七十五號 形金百圓
- 第七十六號 形金百圓
- 第七十七號 形金百圓
- 第七十八號 形金百圓
- 第七十九號 形金百圓
- 第八十號 形金百圓
- 第八十一號 形金百圓
- 第八十二號 形金百圓
- 第八十三號 形金百圓
- 第八十四號 形金百圓
- 第八十五號 形金百圓
- 第八十六號 形金百圓
- 第八十七號 形金百圓
- 第八十八號 形金百圓
- 第八十九號 形金百圓
- 第九十號 形金百圓
- 第九十一號 形金百圓
- 第九十二號 形金百圓
- 第九十三號 形金百圓
- 第九十四號 形金百圓
- 第九十五號 形金百圓
- 第九十六號 形金百圓
- 第九十七號 形金百圓
- 第九十八號 形金百圓
- 第九十九號 形金百圓
- 第一百號 形金百圓



○山葉製洋琴 金參百圓以上  
 ●船來洋琴 三百圓以上三千圓迄各種  
 ●鈴木製ヴァイオリン 百圓以上千五百圓迄各種  
 ●金五圓迄各種其  
 ●他弓箱附屬品  
 ●等各種  
 ●船來ヴァイオリン及弓箱等各種  
 ●樂隊用陸軍々樂用吹奏樂器各種  
 ●戰捷紀念國旗印銀笛數種  
 ●八人組織簡易吹奏樂器一組金參拾圓  
 ●右の外手風琴、ハーモニカ、船來フラジ  
 ●ョーレント各樂器附屬品、和洋音樂書  
 ●各種郵券貳錢御送附わらば美麗なる目  
 ●錄進呈す



新刊音樂書

- 林廣守作曲、ノエルベリー先生和聲 美本 定價金拾錢 不要郵稅
- 高須治輔先生作歌、本元子作曲 頗美本 定價金拾錢 郵稅金二錢
- 一西比利亞地 頗美本 定價金貳拾五錢 郵稅金四錢
- 北村季晴先生作（第參版發行） 頗美本 定價金貳拾五錢 郵稅金四錢
- 一第一篇 須磨の小島 頗美本 定價金貳拾五錢 郵稅金四錢
- 一第二篇 離れ 頗美本 定價金貳拾五錢 郵稅金四錢
- 一全三篇 露の夢 頗美本 定價金貳拾五錢 郵稅金四錢
- 一ノエル、ガング、ピアノ練習書 大形洋裝 定價金五拾錢 郵稅金八錢

ピノアノガルン 調律修繕